平成２９年度

AP 採択事業報告書

2018 年 3 月

岡山大学アドミッションセンター

大学改革推進事業「大学教育再生加速プログラム（入試改革）」の推進について

アドミッションセンター長
田　原　　誠

岡山大学は、文部科学省「大学教育再生加速プログラム」の入試改革プロジェクトに採択されています。採択されたプロジェクトの目的は、これからの世界をリードする若者を育成する教育プログラムとして高く評価されている国際バカロレア（IB）教育について、国内での理解を深めること、さらに、国内大学における IB 教育修了生の受入拡大を図り、IB 校増加計画（200 校）に貢献することによって IB 入試実施大学の拠点校としての役割を果たすことにあります。IB ディプロマプログラム（DP）を修了した学生の受入拡大は、能力・意欲などを多面的・総合的に評価する大学入学者選抜制度の導入につながり、さらには、高校と大学の教育が連携する一体的な改革を実現することができます。

本年度は、前年度に引き続き、国内外の IB 校を対象に IB-DP 修了者の受入などについて広報活動を行うともに、IB 生の受入を検討する際の基本情報となる IB-DP の教育内容などの調査を行いました。調査の一環として、IB-DP 修了生が進学し勉学に励むために大学が備えるべき条件を調査・検証した他、生物の授業における指導法と生徒の活動について、IB 教育と日本の普通科高校の間で比較検証を行いました。

国内の IB 認定校は着実に増加してきており、また、DP 科目の一部を日本語で行う「日本語 DP 課程」が導入され、その実施校が増加しています。このため、国内の大学には、今後、これまで以上に IB-DP 修了生の進学が見込まれるので、「国際バカロレア修了生の国内大学進学と今後の展望について」をテーマに、文部科学省、国際バカロレア認定校、IB-DP 修了生の受入大学から講師をお招きしてシンポジウムを開催し、討論を行いました。

IB 教育の調査・研究の面では、上記の調査に加えて、学会参加などにより、IB 教育の内容や方法について研鑽を深めました。その結果は、全国入学者選抜研究連絡協議会、日本医学教育学会や日本国際バカロレア教育学会などで報告したほか、教育関係の専門誌（International Journal of Multidisciplinary Academic Research）に投稿しました。

IB プログラムは高校までの教育ですが、検証的思考力、多角的な視点、多様性を認める心を育成する「知の理論」（TOK: Theory of Knowledge）は、従来の日本の教育に欠如している学びの要素で、その紹介は大学における教育改革にも大きく貢献すると考えられます。このため、実際に日常の社会問題などの状況を TOK 流に、多角的・検証的に考えるためのワークブックを作成し、これを教材に本学の教養教育科目を開講しました。また、ワークブックを活用して、高校や大学教員を主な対象として、東京、大阪、岡山で計 5 回のワークショップを開催しました。

以上のような活動は、我が国における IB 教育の普及と海外 IB 校への情報伝達に貢献できたものと考えております。

■　岡山大学 大学教育再生加速プログラム（入試改革）運営委員会設置要項

■　岡山大学 大学教育再生加速プログラム評価助言委員会設置要項

■　平成２９年度 岡山大学 大学教育再生加速プログラム（入試改革）運営委員会委員名簿

■　平成２９年度 岡山大学 大学教育再生加速プログラム評価助言委員会委員名簿

■　国際バカロレア（IB）に関する研究報告等

- 第 12 回全国入学者選抜研究連絡協議会大会
  - ・国際バカロレア「Further Mathematics」のカリキュラムについて .....
  - ・Assessment of Japanese Language Education in the International Baccalaureate Program at International Schools in Japan .....
- 第 49 回日本医学教育学会大会
  - ・Increasing rate of International Baccalaureate Admissions into Okayama University Medical School.....
- 日本医学英語教育学会第 20 回学術集会
  - ・An Extra-curricular Active Learning Group Initiated and Executed by IB Nursing Students Focusing on Nursing English Education: A One Year Experience .....
- 日本国際バカロレア教育学会第２回大会
  - ・教養教育科目としての「『知の理論』入門」（岡山大学の事例） .....
  - ・Viewpoints of Academic Advisors on International Baccalaureate Diploma Students Studying at Okayama University.....
- 第 24 回大学教育研究フォーラム
  - ・日本における大学版「知の理論」の可能性.....
- 国際バカロレア 2018 Global Conference Singapore
  - ・Enhancing International Mindedness by increasing IB Diploma Admissions at a Japanese National University：A 5-year Experience .....
- 論文投稿「International Journal of Multidisciplinary Academic Research. Vol 5, No.1, 70-76.」
  - ・VIEWPOINTS OF ACADEMIC ADVISORS ON INTERNATIONAL BACCALAUREATE DIPLOMA STUDENTS STUDYING AT OKAYAMA UNIVERSITY.....
- その他 IB に関する調査結果
  - ・IB friendly Japanese University Survey.....
  - ・6 Month follow-up survey of Freshman IB students After Admission.....
  - ・高等学校での生物の授業における指導法と生徒の関与 .....

■　勉強会・講演会の開催

- ワークショップ「『知の理論』をひもとく UNPACKING TOK」全５回 .....
- IB student talk at L-Café .....

■　シンポジウムの開催

「国際バカロレア修了生の国内大学進学と今後の展望について」 .....

■　平成２９年度 IB 校訪問実績

- ・IB 校訪問.....
- ・アンケート.....

岡山大学 大学教育再生加速プログラム（入試改革）運営委員会設置要項

平成２７年１月２８日
学　長　裁　定

（設置）

第１条　岡山大学（以下「本学」という。）が実施する文部科学省事業「大学教育再生加速プログラム（入試改革）」（以下「AP 事業」という。）の円滑な実施及び運営のため，本学に，岡山大学 大学教育再生加速プログラム（入試改革）運営委員会（以下「AP 運営委員会」という。）を置く。

（業務）

第２条　ＡＰ運営委員会は，国内における国際バカロレア（以下「ＩＢ」という。）教育への理解を促進し，ＩＢ入試を普及させ，及び本学がＩＢ入試実施大学の拠点としての役割を果たすため，次の各号に掲げる業務を行う。

一　国内外のＩＢ校に対する広報活動

二　ＩＢ教育に関する調査研究及び関係機関への情報提供

三　国内におけるＩＢ入試の普及活動

四　本学における入試改善のための提言

五　その他ＡＰ事業の実施に関し必要な事項

（組織）

第３条　AP 運営委員会は，次の各号に掲げる者をもって組織する。

一　教育担当理事

二　アドミッションセンター（以下「センター」という。）長

三　副センター長

四　センターの教員

五　本学の教員のうちから教育担当理事が推薦する者　若干人

六　その他教育担当理事が必要と認めた者

２　前項第５号の委員の任期は，２年とし，再任を妨げない。ただし，欠員を生じた場合の後任者の任期は，前任者の残任期間とする。

（委員長）

第４条　互選により，委員会に委員長を置く。

２　委員長は，AP 運営委員会を招集し，その議長となる。

３　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（議事）

第５条　AP 運営委員会は，委員の半数以上の出席がなければ，議事を開き，議決することはできない。

２　AP 運営委員会の協議事項は，出席委員の過半数をもって決し，可否同数のときは，議長の決するところによる。

（委員以外の者の出席）

第６条　AP 運営委員会は，必要があるときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聴くことができる。

（事務）

第７条　AP 運営委員会の事務は，学務部入試課において処理する。

（雑則）

第８条　この要項に定めるもののほか，AP 運営委員会に関し，必要な事項は，別に定める。

附　則

１　この要項は，平成２７年　１月２８日から施行し，平成２６年１２月１日から適用する。

２　この要項の施行後最初に任命される第３条第５号の委員の任期は，同条第２項の規定にかかわらず，平成２７年３月３１日までとする。

岡山大学 大学教育再生加速プログラム評価助言委員会設置要項

平成２７年１月２８日
学　　長　　裁　　定

（設置）

第１条　岡山大学（以下「本学」という。）が実施する文部科学省事業「大学教育再生加速プログラム（テーマⅢ入試改革）」（以下「AP 事業」という。）の適正かつ有効な事業の遂行のため，本学に，岡山大学 大学教育再生加速プログラム評価助言委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（評価・助言）

第２条　委員会は，AP 事業の活動及び成果に関し，学長からの求めに応じて，必要な評価，助言を行う。

（組織）

第３条　委員会は，ＡＰ事業に関連する有識者のうちから若干人で組織する。

２　委員の任期は１年とし，アドミッションセンター長の推薦に基づき，学長が委嘱する。

３　委員は再任できる。

（委員長）

第４条　互選により，委員会に委員長を置く。

２　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。

３　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（委員会の成立等）

第５条　委員会は，委員の半数以上の出席がなければ，議事を開き，議決することができない。

２　委員会の議事は，出席した委員の過半数をもって決し，可否同数のときは，議長の決するところによる。

（委員以外の者の出席）

第６条　委員会は，必要があるときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聴くことができる。

（事務）

第７条　委員会の事務は，学務部入試課において処理する。

（雑則）

第８条　この要項に定めるもののほか，委員会に関し，必要な事項は別に定める。

附　則

１　この要項は，平成２７年１月２８日から施行する。

２　この要項の施行後最初に任命される委員の任期は，第３条第２項の規定にかかわらず，平成２７年３月３１日までとする。

平成２９年度岡山大学 大学教育再生加速プログラム（入試改革）運営委員会委員名簿

所　属　等	職　名	氏　　名	期間	備　　考
	教育担当 理事	サ ノ　ヒロシ 佐野　寛	H29.4.1～31.3.31	第3条第1項
ｱﾄﾞﾐｯｼｮﾝｾﾝﾀｰ長	入試改革 副学長	タ ハラ　マコト 田原　誠	H26.12.1～31.3.31	第3条第2項
ｱﾄﾞﾐｯｼｮﾝｾﾝﾀｰ	教授	タ ナカ カツ ミ 田中 克己	H26.12.1～31.3.31	第3条第3項
〃	教授	イイ ヅカ マサ ヤ 飯塚 誠也	H26.12.1～31.3.31	第3条第4項
〃	准教授	ウエ ダ イチ ロウ 上田 一郎	H26.12.1～31.3.31	〃
〃	准教授	マ ハ ム ド サ ビ ナ MAHMOOD SABINA	H27.11.1～31.3.31	〃
〃	特任教授	サ タケ キョウ スケ 佐竹 恭介	H26.12.1～31.3.31	〃
理学部	教授	ウエ ダ　ヒトシ 上田　均	H29.6.14～31.3.31	第3条第5項
高等教育開発推進室	准教授	モリ オカ アケ ミ 森岡 明美	H29.6.12～31.3.31	第3条第5項
全学教育・ 学生支援機構	UAA	イシ イ イチ ロウ 石井 一郎	H29.6.9～31.3.31	第3条第5項
基幹教育ｾﾝﾀｰ	講師	ファースト トーマス デビッド FAST THOMAS DAVID	H29.6.13～31.3.31	第3条第5項

（全11名、敬称略、順不同）

平成２９年度岡山大学 大学教育再生加速プログラム評価助言委員会委員名簿

所　属　等	職　名	氏　　名	期間	備　　考
岡山県立岡山城東高等学校	校長	アサ ヌマ ジュン 浅 沼 淳	29. 6.16～30. 3.31	第3条第1項
株式会社 ベネッセコーポレーション	高校事業部進研模試編集長	ウチ ヤマ キミ ヒロ 内 山 公 宏	29. 6.20～30. 3.31	〃
岡山学芸館高等学校	副校長	カ トウ タケ シ 加 藤 武 史	29. 7. 5～30. 3.31	〃
岡山県教育庁	高校教育課高校教育課長	タケ ダ ヨシ ノブ 竹 田 義 宣	29. 6.15～30. 3.31	〃
国際バカロレア機構	国際バカロレア日本大使	ツボヤ イクコ 坪谷ニュウエル郁子	29. 6.13～30. 3.31	〃
広島ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ	理事長	メイ キ 明 木 スーザン	29. 6.22～30. 3.31	〃
岡山大学	教育担当 理事	サ ノ ヒロシ 佐 野 寛	29. 4. 1～30. 3.31	〃
岡山大学ｱﾄﾞﾐｯｼｮﾝｾﾝﾀｰ長	入試改革担当 副学長	タ ハラ マコト 田 原 誠	29. 4. 1～30. 3.31	〃

（全８名、敬称略、五十音順）

国際バカロレア
「Further Mathematics」
のカリキュラムについて

田中克己（岡山大学）

国際バカロレア（IB）ディプロマプログラム（DP）

IBDPのカリキュラム1

グループ		科目の例
1	言語と文学（母言語）	言語A:文学、言語A:言語と文学　など
2	言語習得（外国語）	言語B　、初級語学
3	個人と社会	ビジネス、経済、地理、グローバル政治、歴史、心理学、情報テクノロジーとグローバル社会、哲学、社会・文化人類学、世界の宗教　など
4	理科	生物、化学、物理、デザインテクノロジー、コンピュータ科学、スポーツ・運動・健康科学　など
5	数学	数学スタディーズ、数学SL　、数学HL　、数学FHL
6	芸術	音楽、芸術、フィルム、などの他に選択科目

IBDPのカリキュラム2

- 6つのグループの中から1科目ずつ選択
- そのうち最低3つ（4つまで）を上級レベル(HL)で
- 残りの2つまたは3つを標準レベル(SL)で
- コアの3つは必修
- HLは2年で240時間
- SLは2年で150時間

学部学科専攻等の指定科目その1

学部•学科•専攻等			募集人員	指定する科目
理学部	数学科		若干人	数学（HL成績評価4以上）
	物理学科			数学、物理から1科目（HL成績評価4以上）
	化学科			数学、物理、化学から1科目（HL成績評価4以上）
	生物学科			数学、物理、化学、生物から1科目（HL成績評価4以上）
	地球科学科			物理、化学から1科目（HL成績評価4以上）
医学部	保健学科	看護学	若干人	物理、化学、生物から1科目（HLないしSLを履修、成績評価は問わない）
		放射線技術科学		
		臨床技術科学		
工学部	機械システム系学科		若干人	数学（HL成績評価4以上）及び物理（HL成績評価4以上またはSL成績評価4以上）
	電気通信系学科			
	情報系学科			数学（HL成績評価4以上）
	化学生命系学科			化学（HL成績評価4以上）及び数学（HL成績評価4以上またはSL成績評価4以上）

学部学科専攻等の指定科目その2

学部•学科•専攻等		募集人員	指定する科目
環境理工学部	環境数理学科	若干人	数学（HL成績評価4以上）
	環境デザイン工学科		物理、化学から1科目及び数学（どちらか1科目はHL成績評価4以上。もう一方はSL成績評価5以上又はHL（成績評価は問わない））
	環境管理工学科		物理、化学、生物から1科目及び数学（どちらか1科目はHL成績評価4以上。もう一方はSL成績評価4以上又はHL（成績評価は問わない））
	環境物質工学科		数学（SL成績評価4以上又はHL（成績評価は問わない））及び物理か化学のどちらかHL成績評価4以上
歯学部		若干人	物理、化学、生物、数学から1科目HLで4以上
農学部	総合農業科学科	若干人	物理、化学、生物から2科目（HL又はSLで履修、成績評価は問わない）
マッチングプログラムコース		若干人	グループ6（芸術）以外から1科目（HL成績評価4以上）

学部学科専攻等の指定科目その3

学部•学科•専攻等		募集人員	指定する科目
文学部	人文学科	若干人	日本語A（HL4以上）
教育学部	学校教育教員養成課程	若干人	1科目HL4以上
	養護教諭養成課程	若干人	グループ6（芸術）以外から1科目HL4以上
法学部	法学科（昼間コース）	若干人	英語HL4以上 グループ3から1科目HLないしSL4以上
経済学部	経済学科（昼間コース）	若干人	グループ3から1科目HL4以上または数学HL4以上
医学部	医学科	3人	物理，化学、生物から2科目および数学（うち1科目はHL4以上、他の2科目はSL5以上かHL3以上）合計39点以上（45点満点）
薬学部	創薬科学科	若干人	物理、生物から1科目及び化学及び数学（うち1科目をHLで4以上、他の2科目をSLで5以上またはHLで3以上）
	薬学科		

IBDPの数学

科目	日本では	対象生徒の希望学部
数学スタディーズSL Mathematics studies SL	文系数学	社会科学、人間科学、言語学など
数学SL Mathematics SL	一般数学	数学を使う学部
数学HL Mathematics HL	理系数学	物理学、工学など
数学FHL Further Mathematics HL	数理科学系数学	数学、数理科学など

IBDP数学の特徴

- 「数学スタディーズ」はSLのみ
- 「数学（FHL）」はHLのみ
- 「数学（FHL）」は「数学（HL）」を合わせて履修していること

数学（FHL）のカリキュラム

トピックス	タイトル	授業時間
1	線形代数	48
2	幾何学	48
3	統計と確率	48
4	集合・関係・群	48
5	解析学	48
6	離散数学	48
計		240 ただし3～6のどれか1つは数学（HL）で履修

トピックス1：線形代数

- 行列の加減、積
- 逆行列
- 行基本変形
- 連立方程式の解法
- n次元実ベクトル空間
- 線形変換
- 線形変換の行列表現
- 回転、対称変換
- 2次行列の固有値・固有ベクトル

トピックス2：幾何学

- 三角形の相似と合同
- 三角形の三心など
- 円と接線
- 角の2等分線、アポロニウスの定理など
- 円の方程式
- 放物線、楕円、双曲線
- 曲線の媒介変数表示
- 2次曲線と2次形式

トピックス3：統計と確率

- 累積分布関数、幾何分布、二項分布、分散
- 1次結合の分散
- 期待値
- 中心極限定理
- 信頼区間
- 帰無仮説、有意水準、棄却域
- 相関係数と共分散

トピックス4：集合・関係・群

- 集合の和、差、補集合
- 順序対
- 1対1写像、逆関数
- 2項演算と結合律、分配律、交換律
- 群と単位元、逆元
- 群の例
- 演算表、アーベル群
- 置換の巡回表現
- 部分群、準同型

トピックス5：解析学（微分積分学）

- 実数の無限列とその収束発散
- 無限級数の収束とその判定法
- 関数の連続性と微分可能性
- 積分の定義
- 広義積分
- 微分方程式
- 中間値の定理
- ロピタルの定理、テーラー展開

トピックス6：離散数学

- 超限帰納法、鳩の巣論法
- ユークリッドの互除法
- ディオファントス方程式
- モジュラー計算
- フェルマーの小定理
- グラフについて
- 中国人郵便配達問題
- 漸化式

日本の高校数学と数学（FHL）

	単元	左を含む数学(FHL)のトピックス
数学Ⅰ	数と式	2
	図形と計量	2
	2次関数	2
	データの分析	3
数学Ⅱ	図形と方程式	2
	指数関数・対数関数	5
	三角関数	5
	微分・積分の考え	5
数学Ⅲ	平面上の曲線と複素平面	2，5
	極限	5
	微分法	5
	積分法	5
数学A	場合の数と確率	3
	整数の性質	6
	図形の性質	2
数学B	確率分布と統計的な推測	3
	数列	6
	ベクトル	1

数学（FHL)が日本の高校数学を超える部分1

- トピックス4：集合・関係・群
  指導要領のどの部分もこのトピックスに含まれない

↓

岡山大学理学部数学科の専門科目
「代数学 Ⅰ」に相当

数学（FHL)が日本の高校数学を超える部分２

岡山大学 OKAYAMA UNIV.

- トピックス1：線形代数
  新指導要領から行列が消えたため、
  ベクトルを除くほとんどが日本の高校数学
  の範囲を超えている。

↓

岡山大学理学部数学科の基礎教育科目
「線形代数」に相当

数学（FHL)が日本の高校数学を超える部分３

岡山大学 OKAYAMA UNIV.

- トピックス6：離散数学
  指導要領の「整数の性質」と「数列」を
  除き、ほとんどの部分が日本の高校数学
  の範囲を超える

↓

工学部情報系の基礎教育科目
「情報数学」や「離散数学」に相当

結論

岡山大学 OKAYAMA UNIV.

- Further mathematics HL（数学（FHL））はIB入試の受験資格において数学（HL）と同等に扱ってよい。

- 単位認定するとすれば、
  数学（FHL）のトピックス1・4・6についてはその授業時間48時間に相当する3単位ないし4単位を各トピックスにたいし認定してよいのかもしれない。

Assessment of Japanese Language Education in the International Baccalaureate Program at International Schools in Japan

Mahmood Sabina, **Satake** Kyosuke, **Iizuka** Masaya, **Ueda** Ichiro, **Tanaka** Katsumi, **Tahara** Makoto (Okayama University Admission Center)

The number of International Baccalaureate (IB) students seeking admission into Okayama University is gradually increasing. Presently, there are 20 IB students enrolled in the undergraduate program. With the exception of English oriented courses, at most Japanese Universities, the language of instruction is Japanese and all undergraduate students are required to take classes, write reports and make presentations in Japanese. Therefore, it is important to explore the different levels of Japanese offered within the IB curriculum, in order to understand the Japanese language proficiency of IB students entering the Japanese Higher Education System. Presently, the IB curriculum offers Japanese language as A (native level), B (communication level) and AB Initio (Introductory level). A survey was carried out by Okayama University in 10 International Schools (IS) in Japan, using a questionnaire with 6 closed ended, multiple choice questions. Results showed that, at IS, students came from various backgrounds including Japanese natives, returnees, mixed race and foreign nationals. Almost 88% of IS offered both Japanese A and B and 12% offered only Japanese A. About 87.5% of students taking Japanese A had Japanese parents, compared to 50% mixed race students and 37.5% Japanese returnee students. Foreign students did not take Japanese A. Inversely, there were no Japanese students taking Japanese B, but 88% foreign students, 63% mixed race students and 37.5% returnee students took Japanese B. Regarding choice of Japanese A or Japanese B, in 50% students, it was parent recommended, in 37% placement was made following a language assessment test and in 13%, it was the students choice. Almost 50% IS thought that the IB Japanese language proficiency was insufficient to study at Japanese Universities and only 13% felt the Japanese level was sufficient. Regarding IB students taking Japanese A with the aim of studying at Japanese Universities, most IS replied that "sometimes" it was the case but not always. Results of this survey reveal a certain trend towards students from Japanese backgrounds choosing Japanese A and aiming to study at Japanese Universities, while Japanese B is chosen by students of various backgrounds including foreign students, whose main aim is to learn the language and not always with the intention to enter Japanese Universities.

Japanese Language in the IB Diploma Program

The International Baccalaureate Organization (IBO) is a non-profit organization established in Geneva, Switzerland in 1968, which introduced an internationally recognized pre-college curriculum to reform education and nurture global citizens with leadership skills (1-2). In 1979, MEXT officially recognized the IB diploma (IBDP) equivalent to Japanese high school graduation (3-4). The IBDP curriculum is based on 6 subject groups surrounding 3 core requirements. All courses are studied for 2 years and students must choose 1 subject from the first 5 groups (Language & Literature, Language Acquisition, Individuals & Societies, Experimental Sciences and Mathematics), in addition to a 6.th subject, which may be an arts subject chosen from Group 6, or another subject from groups 1-4. At least, 3 out of 6 subjects are studied at "higher level" (HL) with 240 teaching hours. The remaining 3 subjects are studied at "standard level" (SL) with 150 teaching hours. The Japanese Language A (Jap. A), is from Group 1, or the Language and Literature group and can be studied in HL or SL. Japanese Language B (Jap. B), and Japanese ab initio are group 2 or the Language Acquisition group subjects. Jap. A and Jap.B can be taken in HL or SL but ab initio is only offered in SL. Students can obtain a bilingual diploma by taking 2 languages from Group 1. Jap. A prepares the IB student for native level Japanese, whereas Jap. B is intended for students who have had some previous experience of learning Japanese and ab initio courses are for beginners or students who have little or no exposure to the Japanese language (5).

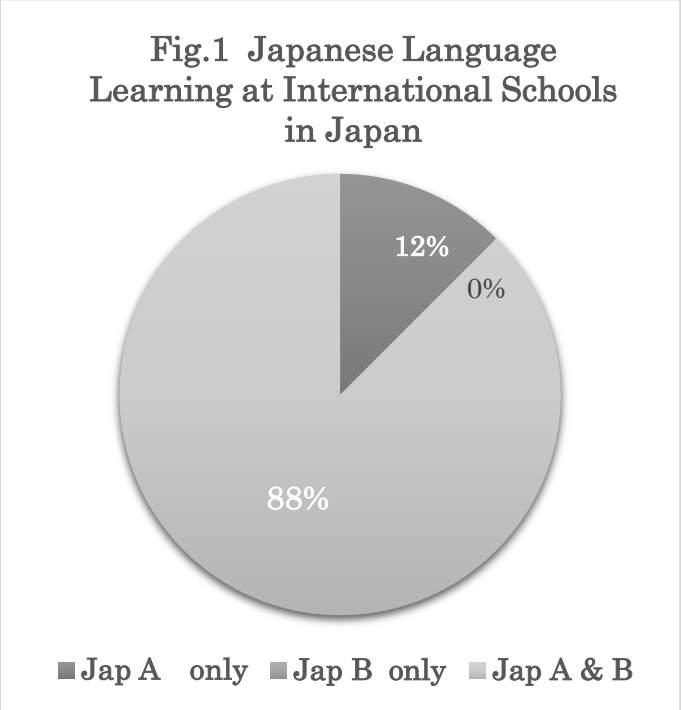
IB Diploma students at Okayama University

With the ongoing globalization of Japan, there has been a rapid growth in the internationalization of Japanese universities, since higher education plays a very important role in the process of globalization (6). The number of IB students seeking admission into Japanese Universities is increasing gradually. Okayama University was the first national university in Japan to accept IBDP students as high school graduates in 4 faculties and 1 special course in 2012, and in all 11 faculties and the special course from 2015 (7), without having to take the examinations by the National Center for University Entrance Examination (NCUE) or any other entrance exams at Okayama University. Presently, at Okayama University, there are 20 IB Diploma students from IB schools in Japan and abroad, enrolled in 11 different faculties and 1 special course. Besides the special program which will introduce an all-English curriculum from October 2017, the medium of instruction in all 11 faculties at Okayama University, is Japanese. At the undergraduate level, along with other Japanese high school graduates, IB students are also expected to take lessons, write reports and make presentations in Japanese. Following discussions with Okayama University IB student academic advisors and receiving inquiries from students, teachers and parents from IB schools, regarding the level of Japanese required at Japanese Universities, a survey was carried out to explore the different levels of Japanese being studied by IB students at International Schools in Japan.

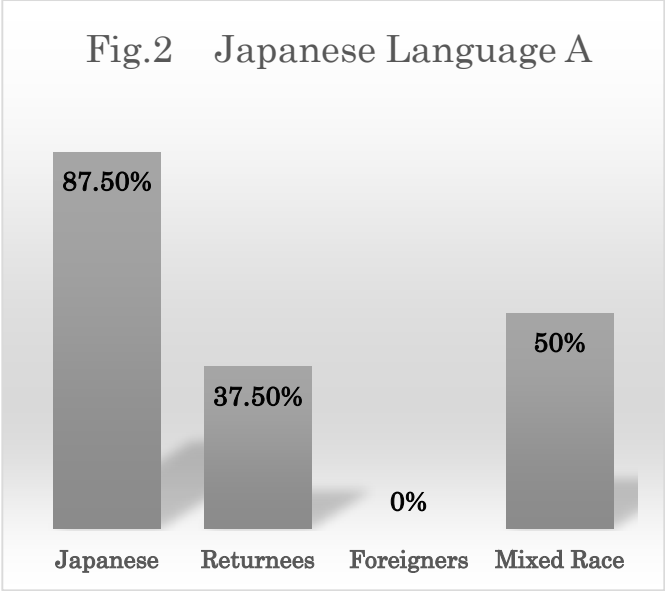
Method: A questionnaire with 6 closed ended, multiple choice questions was constructed and approved by Okayama University Admission Center Members. This survey was carried out during visits by Admission Center

members, to various International Schools (IS) in Japan. This report contains survey data answered by academic advisors of 10 international schools in Japan, between September 2016 and February 2017.

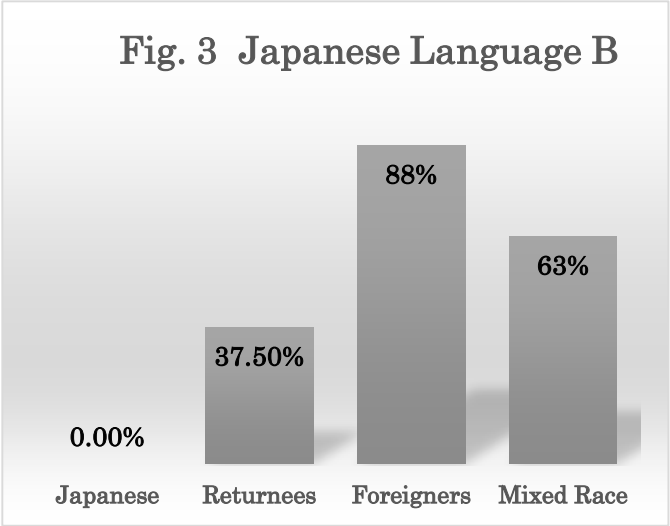
Results: Analysis of data obtained from 8 IS revealed that, in IS, students came from various backgrounds (Japanese, returnees, mixed race or half with one parent Japanese and foreign nationals). Almost 88% of IS offer both Japanese A and Japanese B courses and only 12% IS offer only Japanese A. There was no IS included in the survey that offered only Japanese B (Fig. 1).



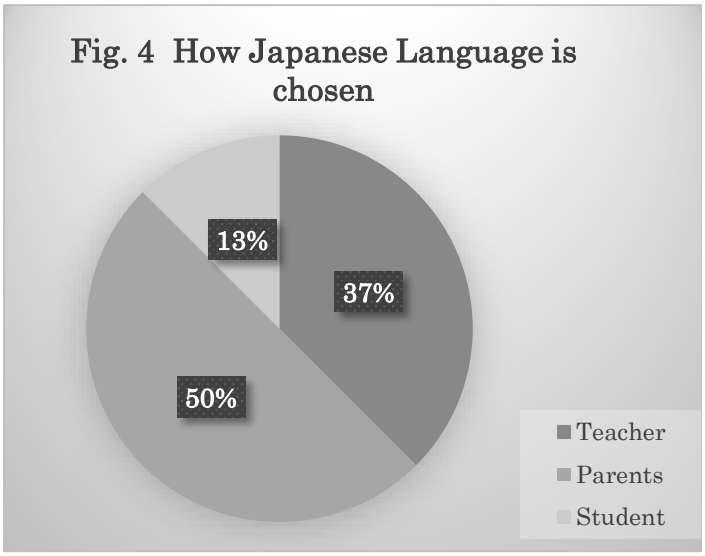
Regarding the type of students who take Japanese A, in 87.5% of IS, Japanese students of Japanese parents living in Japan took Japanese A. In 50% IS, mixed race students (half) and in 37.5% IS, returnee Japanese students, took Japanese A. There were no foreign students among the 10 IS, who took Japanese A (Fig. 2).



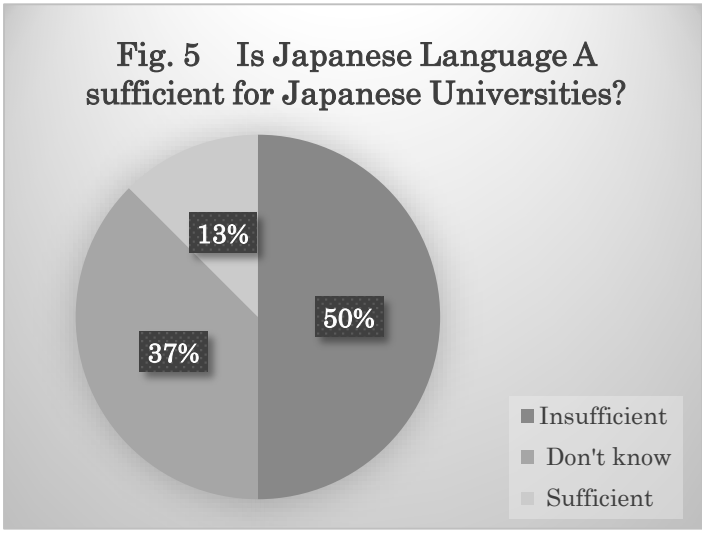
With reference to students taking Japanese B, there were no Japanese students in any IS taking Japanese B. In 88% IS, Japanese B was chosen by foreign students and in 63%, by mixed race students and in 37.5%, by returnee students (Fig. 3).



When asked about how IS students choose Japanese A or Japanese B, 50% IS replied that, it was recommended by their parents, while 37% IS schools placed students in different levels following language assessment placement tests and 13% schools let the students choose (Fig. 4).



When asked whether the level of Japanese A, was sufficient to study at Japanese Universities, 50% IS replied it was not, while 37% felt it was difficult to say and only 13% felt the level was sufficient (Fig. 5).



In answer to whether students who took Japanese A, were aiming to study at Japanese universities, almost all IS answered "sometimes".

Conclusion:

There is a growing concern about how much Japanese proficiency is required to study at the different faculties of Japanese Universities, where the language of instruction remains Japanese in almost all subjects, with the exception of International Courses. Results of this survey reveal a certain trend towards students from a Japanese background choosing Japanese A and aiming to study at Japanese Universities. However, Japanese B is chosen by students of various backgrounds including foreign students. Further survey is necessary to understand and get a clearer picture of actual facts.

References

1. International Baccalaureate Organization: http://www.ibo.org/about-the-ib/
2. Conley et al. (2014) International Baccalaureate Diploma Program: Examining College Readiness. *The Education Policy Improvement Center.*
3. Japan International Baccalaureate: http://www.ibo.org/about-the-ib/the-ib-by-country/j/japan/
4. Iwasaki, K. (2013) Will the International Baccalaureate Take Off in Japan? *Nippon.com.*
5. International Baccalaureate Organization: http://www.ibo.org/programmes/diploma-programme/curriculum/language-and-literature/
6. Yonezawa A (2009). The Internationalization of Japanese Higher Education: Policy Debates and Realities. Nagoya Koto Kyouiku Kenkyu No. 9.
7. Ueda et al. (2015) Okayama University International Baccalaureate entrance examination design- Present and Future (In Japanese). 10th Nyuken Association Meeting.

第 49 回日本医学教育学会大会

日時：平成２９年８月１８日（土）
会場：札幌コンベンションセンター
セッション名：入学者選抜
表形式：口演（一般演題）
演題名：岡山大学医学部における国際バカロレア入学率の上昇

演題名（英語）：Increasing rate of International Baccalaureate Admissions into Okayama University Medical School

Mahmood Sabina *, Satake Kyousuke, Iizuka Masaya, Tanaka Katsumi, Ueda Ichiro, Tahara Makoto
Okayama University, Admission Center, 2-1-1, Tsushima Naka, Kita Ku, Okayama 700-8530, Japan Tel: +81-86-251-7284; Fax: +81-86-251-7197

The International Baccalaureate Diploma (IBDP) is a standardized international curriculum equivalent to a third year high school qualification. Among the 20 IBDP students admitted to Okayama University between April 2012 and April 2017, 5 belong to the Medical Faculty (medical school, n=3; nursing school, n=2). Admissions into the 6 year medical course is presently limited to 3 students per year. IBDP students seeking admission into the Medical School are required to have a minimum score of 39 out of a total score of 45; Japanese Language as a mandatory subject, document reviews and an interview assessment. An IBDP score of 38 or above ensures admission to most top universities worldwide. Scores of IB students presently enrolled ranges from 39-42. Through talks and surveys involving IBDP students, IB college counselors and parents of IB students, the Admission Center has found some common factors contributing to an increase inflow of IB students, such as; national university; acceptance of IBDP scores without any admission tests; low tuition fees; reasonable cost of living and an opportunity to graduate from a highly recognized medical school in Japan. Okayama University believes that the IB education system prepares students not only academically but also teaches them to think and accept situations through a broader perspective. Since medicine is an amalgamation of science and arts, and as major educational goals of Okayama University aim at nurturing students with a "cosmopolitan quality on the basis of cross-cultural understanding", IB students are considered to possess exceptional skills in achieving such goals.

日本医学英語教育学会第 20 回学術集会

日時：平成２９年７月２２日（土）
会場：Orque d'or Salon、名古屋
演題名：An Extra-curricular Active Learning Group Initiated and Executed by IB Nursing Students Focusing on Nursing English Education: A One Year Experience

Sabina Mahmood[1] *, Nobuko Ohi[2], Kyousuke Satake[1], Makoto Tahara[1]
[1]Okayama University, Admission Center, 2-1-1, Tsushima Naka, Kita Ku, Okayama 700-8530, Japan Tel: +81-86-251-7284; Fax: +81-86-251-8485
[2]Okayama University Graduate School of Health Sciences

In recent years, the number of foreign patients visiting Japanese hospitals and the number of Japanese nursing staff participating in global projects has increased. Therefore, training nursing students and staff to use English in a clinical setting has become essential. As part of the Super Global University program, the Graduate School of Health Sciences at Okayama University, began accepting International Baccalaureate (IB) Diploma students into the 4 year nursing course, since 2015. With their exceptional educational background, specialized communication skills and a well-rounded persona, IB students were expected to bring a new outlook and contribute further towards the internationalization of nursing education in Japan. With assistance from the Admission Center and Health Science Department, three 1st. and 2nd year IB students formed a 10 member "Nursing English Study Group", with 7 other nursing students. This study group, headed by a medical teacher, met once a month after school for 60 minutes. Topics of discussion ranged from practicing nursing English technical terms to role playing in English in different clinical settings. The medium of instruction was strictly English. Feedback from the students participating in the study group for a year revealed that, students were comfortable practicing nursing English outside the classroom. This opportunity enabled them to improve their English speaking skills in the clinical setting and helped them interact with new friends in English. To improve English nursing education in Japan, English based activities eagerly initiated by nursing students needs strong support from teachers to continue.

教養教育科目としての「『知の理論』入門」（岡山大学の事例）

森岡明美・田原誠
（岡山大学）（岡山大学）

国際バカロレア (以下 IB) は高校までのプログラムだが、その教育理論と実践には大学が学ぶべき要素がふんだんにある。中でも、検証的思考力、多角的な視点、多様性を認める心を育成する「知の理論」（以下 TOK）は、日本の教育に欠如している学びの要素であり、大学教育に TOK を導入することは、現在重要課題である教育改革に大きく貢献すると考えられる。

岡山大学では今年度第２学期に、教養教育科目（週２時間×８週間）として、「『知の理論』入門」を提供した。対象は、IB 教育に馴染みのない学生である。考える訓練を受けてきていない学生にとっては、TOK はとっつきにくい科目であると考え、その助走として、第１学期には「クリティカル・シンキング（検証的思考）入門」を提供した。この授業では、まず論理的に考えるために、伝統的な帰納法、演繹法を始め、ビジネスでよく用いられるロジック・ツリーやピラミッド・ストラクチャーで思考練習をした。最初の発表課題は、「岡山または岡山大学の課題を見つけ、ピラミッド・ストラクチャーを使うなどして、論理的に、聞き手が納得できる建設的提案をする」ことであった。そして学期後半は、メディア・リテラシーについて論議した後、論理的検証に加えて、前提を疑い、多面的・多角的に見る見方を養うクリティカル・シンキングについて学んだ。最終発表課題は、「社会で為されている議論や主張について、一見当然と見える前提を疑い、その主張が妥当かどうか多角的な視点でクリティカルに検証する」ことであった。学生たちは、十分に課題をこなしていたが、授業終了後のアンケートでは、検証的な見方をする行動は起こすようになったが、それを学習全般に応用する意識の変容までは見られなかった。

第２学期の「知の理論入門」授業では、本稿執筆者らの著書「知の理論をひもとく」（Inugai-Dixon, et.al. 2017）を教科書に使用し、３つの「知識の領域」（芸術、ヒューマンサイエンス、自然科学）をそれぞれ４時間ずつかけてカバーした。TOK の抽象的な概念自体には時間をあまり費やさず、新聞記事などを TOK 思考法で分析した実践例（教科書の第２章）を演習しつつ適宜 TOK について解説した。宿題として学生は、関連領域の素材文の TOK 分析（第３章）に取り組む。授業では３人グループで各自の分析を発表し合い、「主張」を見つけ出し、「知るための方法」「個人的な知識～共有された知識」「主張の特性」に関して主張を分析し、最後に「根源的な問い」を導き出す。分析実践を中心としたのは、１学期間の短さという現実問題と、TOK は「語る」ものではなく「実践する」ものという信念からである。

ペアワークやグループワークの際、一見おとなしそうな学生も発言し、積極的に参加しているのが観察された。第２章の実践例を演習する時、学生たちが教科書に既に提示してある解答例を気にしないで、自分たち独自の考えを出し合い分析していたのは興味深く、驚きでもあった。

授業後のアンケートから、履修生たちはもともと考えることが好きで、論理的思考ができていたということがわかった。しかしそのような学生たちにとっても、TOK は新しい概念をもたらし、少し難しいと感じられたようだった。特に、「主張の特性」についての理解度が低かった。

教えてみてわかったことは、「クリティカル・シンキング」は、「知の理論」のための助走としては、あまり役に立たないということである。むしろ、哲学のほうが役に立つかもしれない。ある学生からのコメントには「１学期のクリシン入門と２学期の TOK は、まるで別物のように感じた。１-２学期通しで TOK をやってみたかった。同じ題材をクリシンと TOK の２つの見方で見るとどうなるのかも気になる」と記述されていた。また、「抽象的な概念などについて、もっと時間を費やして説明してほしかった」という意見も聞かれた。TOK を教えるには、１学期（週２時間×８週間）では足りないと実感したので、来年度は、「知の理論１」と「知の理論２」を２学期にわたり提供する予定である。

結論として、「知の理論」は、ロジカル・シンキングともメディア・リテラシーとも哲学とも異なる内容を提供でき、大学の教養教育科目として、価値があると思う。TOK と日本の大学教育との親和性は高いと感じた。TOK を IB だけに限定せず、大学の教養教育に導入することを他大学にも提案したい。

Viewpoints of Academic Advisors on International Baccalaureate Diploma Students Studying at Okayama University

Mahmood Sabina
(Associate Professor, Okayama University Admission Center)

The number of International Baccalaureate (IB) Diploma students taking admission into Japanese Universities is on the rise. Okayama University was the first national university in Japan, to establish the IBDP admission policy in which, IB students are not required to take the National University Entrance Examination or any other written exams, for admission into the undergraduate course. In 2012, IB student enrollment began in 4 faculties and 1 special course, and from 2015, all 11 faculties and the special course welcomed IB students. As of April 2017, 20 IBDP students from 6 IB schools in Japan and 6 IB schools abroad, have enrolled at Okayama University in different faculties.

In order to make Okayama University more IB friendly, Okayama University Admissions Center (AC) has set up an IB student support system with IB student advisors, to help IB students adjust to academic and campus life and meet IB student needs. In 2016, a survey on IB students was published by the AC, which looked into the views and perspectives of IB students studying at Okayama University. The feedback obtained from the students, helped student advisors to understand IB student perceptions, their hurdles and their expectations. The present study, is a continuation of the earlier study, highlighting perspectives of Academic Advisors (AAs) of different faculties hosting IB students. AC members, actively involved in IB admissions and IB student support, constructed a questionnaire for faculty AAs where IB students are presently enrolled. Each of the 10 questions in the questionnaire, was intended to give AAs an opportunity to share their views and experiences with IB students studying at their respective departments, for a period of at least one year from the time of enrollment.

From October 2016 to January 2017, 11 AAs were interviewed by 2 AC members at their respective offices. Interviews revealed that, AAs who were not directly involved in IB admissions, were not familiar with the IB education. Most AAs were impressed by the positive, interactive and good communication skills of IB students. Regarding academic performance, some AAs reported IB students to be doing exceptionally well, while others thought they were average and few, expected better academic performance. Overall impressions of IB students included serious, cheerful, talkative students, who were also good at group work and presentations. Regarding adaptability in a Japanese educational environment, some AAs felt, IB students from IB schools in Japan, who had some previous exposure to Japanese education, adapted faster. Unlike Japanese high school students who are trained in the traditional Japanese education system of emphasizing knowledge acquisition, IB students seemed more accustomed to discussion based lessons. Although IBDP students at Okayama University are enrolled without having to take the standard written examination or any other individual entrance examinations, their

eagerness to learn, is no less than Japanese high school students, who take the general university entrance exam. Therefore, support from AAs in the early stages of orientation, is essential for IB students to adjust to the new way of learning and also a new educational approach. At Okayama University, AAs are making every effort to understand and educate themselves about the IB education system and IB students. Some faculties are even holding meetings to discuss alternative ways to educate IB students. As a pioneer of IB student admissions in Japan, collaborative efforts by IB student advisors and AAs at Okayama University, are fully underway to create a more IB friendly University and increase the number of IBDP students.

日本における大学版「知の理論」の可能性

企画者・司会者・話題提供者：松下佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター）
話題提供者：田原　誠（岡山大学大学院環境生命科学研究科）
話題提供者：渡邉雅子（名古屋大学教育発達科学研究科）
話題提供者：坂本尚志（京都薬科大学一般教育分野）

日本の学校に普及しつつある IB（国際バカロレア）プログラムの中でも、「知の理論（Theory of Knowledge: TOK）」は IB の特徴を最もよく表わすものとして注目されている。だが、日本の教育制度の下で考えれば、「知の理論」は、さまざまな学問分野を広く学びながらその共通性と差異に意識が向けられる大学の教養教育においてこそ、大きな意義をもつのではないだろうか。

本セッションでは、「知の理論」を大学教育での実践、国際比較、バカロレア哲学試験との違い、分野横断性などの点から多角的に論じ、日本における大学版「知の理論」の可能性を探る。

「教養教育科目としての『知の理論入門』（岡山大学の取り組み）」

田原　誠

IB 教育を受けていない大学生を念頭に作成した TOK 思考法のワークブック（『知の理論をひもとく』Inugai-Dixon et al., 2017）を使用して、「知の理論入門」を開講した。ワークブックの実践例を演習しつつ TOK 思考法を説明した後、ワークブックで例示した素材について、「主張」を抽出して TOK 流に分析し、最後に「根源的な問い」を導き出す実践にグループで取り組んでもらった。授業アンケートの結果などから、「知の理論」は、ロジカル・シンキングや哲学とも違う思考法や分析方法を提供でき、教養教育科目として価値が高いと判断した。

「2 つのバカロレア比較から日本版大学の知の理論を提案する」

渡邉雅子

「フランス人を作る」ためのバカロレアと「グローバル化に対応できる人材育成」のための国際バカロレアの比較を行いながら、「日本型国際バカロレア」に位置づけた大学版知の理論の目的とその導入方法を提案したい。「知の理論」は西欧の教養である事に留意しつつ、大学ではこれに東アジアの伝統を組み入れることで、知の在り方の相対化と使い分け、新たな組み合わせができるようになる事を目指す。ポスト近代時代の知の形と共通教養・コミュニケーションツールとしての知の可能性を探りたい。

「『知の理論』はどのような知を扱うのか―バカロレア哲学試験との比較で考える―」

坂本尚志

「知の理論」はいかなる知を対象とし、それをどのような方法で扱うことを学ばせるものなのだろうか？ 本報告はこの問いを、フランスの高校最終学年で行われる哲学教育と、その大きな目的であるバカロレア哲学試験との比較によって考察することを目的とする。両者はともにある形式の知を扱うものであり、その学習成果はエッセイやディセルタシオン（哲学小論文）によって表現され、評価される。両者の間の共通点と相違点について、学習される知の内容と表現の方法に焦点を当てて比較検討していくことによって、「知の理論」の特徴がより明確に理解されるであろう。

「分野横断性としての汎用性―大学版『知の理論』への期待―」

松下佳代

汎用性は、①分野固有性を捨象した汎用性（例：シンキングツールなど）、②分野固有性に根ざした汎用性（例：sourcing というスキル）、③分野横断性としての汎用性に分類することができる。他者と協働しながら、現実世界の状況や問題を分析・解決しようとするときに必要になるのは、問い・言語・方法などの分野による違いを認識した上で、状況や問題にあわせて参照する分野を選んだり、組み合わせたりすることを可能にする「分野横断性としての汎用性」ではないだろうか。「知の理論」はそのためのツールになりうる。日本学術会議の分野別参照基準などもリソースとしながら、大学教育版の構築について考えてみたい。

IB Global Conference Singapore_2018: Breakout Session Abstract

Session Title

Enhancing International Mindedness by increasing IB Diploma Admissions at a Japanese National University: A 5-year Experience

Session Description

This session will focus on how a National University in Japan took the initiative to recognize the IB Diploma and accept IB students without imposing admission tests and how IB students are helping to initiate international mindedness among other students and faculty. IB students who are presently enrolled include many Japanese Nationals, who brought with them a mindset to think beyond Japanese cultural norms and be more open to cultural diversity. These students have shown that it is not the person's nationality or mother tongue that makes him or her more international minded but their education. IB education appears to have influenced their take on any issue with a more worldly approach. IB students tend to create a learning environment and encourage other students to form a community of learners. They also value the experience of others. This new trend of learners has influenced the University decision to increase IB admissions, so that IB students can build a career in Japan and also internationalize the Japanese society by encouraging local students to think globally from their own home ground.

Session Goal

The ultimate goal of this session is to share the positive experiences of hosting internationally minded IB students and encouraging the development of a more proactive and smooth transition of IB Diploma students into Japanese Higher Education. This session will highlight IB student voices, experiences of IB academic advisors and University Admission officers, at a Japanese National University.

VIEWPOINTS OF ACADEMIC ADVISORS ON INTERNATIONAL BACCALAUREATE DIPLOMA STUDENTS STUDYING AT OKAYAMA UNIVERSITY

Mahmood Sabina
Associate Prof. Okayama University, Dept. of Academic Affairs, Admission Center, Okayama
JAPAN
Satake Kyosuke, Iizuka Masaya, Tanaka Katsumi, Ueda Ichiro & Tahara Makoto
Admission Center / Okayama University, **JAPAN**
*Corresponding author: sabina@okayama-u.ac.jp

ABSTRACT

The number of International Baccalaureate (IB) Diploma students taking admission into Japanese Universities is on the rise. Okayama University is a Japanese National University, where 20 IB students are enrolled in 11 faculties and one special course. As a step towards creating an IB friendly University, in 2016, Okayama University Admissions Center (AC), published a study on IB student perspectives about student life at Okayama University. This study is a continuation of the earlier study, highlighting perspectives of Academic Advisors (AAs) of different faculties hosting IB students. From October 2016 to January 2017, 11 AAs were interviewed using a questionnaire regarding their impressions of IB students, in their respective faculties. Interviews revealed that, AAs who were not directly involved in IB admissions, were unfamiliar with IB education. Most AAs were impressed by the positive, interactive and good communication skills of IB students. Regarding academic performance, some AAs reported IB students to be doing exceptionally well, while others thought they were average and few AAs, expected better academic performance. Overall impressions of IB students included serious, cheerful, talkative students, who were also good at group work and presentations. Regarding adaptability in a Japanese educational environment, some AAs felt, IB students from IB schools in Japan, who had some previous exposure to Japanese education, adapted faster. Unlike Japanese high school students who are trained in the traditional Japanese education system of emphasizing knowledge acquisition, IB students seemed more accustomed to discussion based lessons. Okayama University is eager to increase IB student admissions and hopes their educational background, will internationalize Japanese Higher Education and open new doorways into the Global era.

Keywords: Internationalization, International Baccalaureate, Japanese Higher Education, Student Support, Student Friendly University.

INTRODUCTION

In recent years, globalization and higher education reform is underway in Japan. As part of an active reform to internationalize the educational environment and transform Japanese Universities into effective, integrated international Universities, it is essential to become universally accessible, by increasing international student enrollment and accepting students from various educational backgrounds. The International Baccalaureate Organization (IBO) is a non-profit organization established in Geneva, Switzerland in 1968, which introduced an internationally recognized pre-college curriculum to reform education and nurture global citizens with leadership skills[1-2]. Presently, the IB program consists of the “Primary Years Program” (PYP), for students aged 3-12, years, the “Middle Years Program” (MYP), for students aged 11-16 years, the “Diploma Program” (DP) and the IB Career-related Program (CP), for high school students aged 16-19 years. The IB intends to provide an education

emphasizing international mindedness. The DP prepares students for postsecondary education and provides students with the knowledge and skills required for success at university, and develop nonacademic skills related to workload and time management. In addition to 6 subject groups, the DP core component consists of the extended essay (EE), theory of knowledge (TOK), and creativity-action-service (CAS), which motivates and engages students to develop additional, non-scholastic real life skills. In 1979, the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), officially recognized the IBDP equivalent to Japanese high school graduation[3-4]. In 2014, MEXT, introduced the Super Global University (SGU) project and selected 37 top Universities, that would receive either 1 of the 2 types of financial aids, A and B, for the reformation of their present university educational system in compliance with global trends [5]. Okayama University was selected under type B, with the aim of developing into a role model global university, stimulating cooperation with top world universities and fostering innovative approaches, for global competitiveness. Okayama University was the first national university in Japan, to establish the IBDP admission policy in which, IB students were not required to take the National University Entrance Examination or any other written exams, for admission into the undergraduate course. In 2012, IB student enrollment began in 4 faculties and 1 special course, and from 2015, all 11 faculties and the special course [6] welcomed IB students. With the exception of the 6 year medical course, which requires a minimum IBDP score of 39 for application, all faculties including the special course require a minimum IBDP score of 24 to apply, in addition to the language subject, Japanese A and a minimum age of 18 years at the time of enrollment. As of April 2017, 20 IBDP students from 6 IB schools in Japan and 6 IB schools abroad, have enrolled at Okayama University.

In order to make Okayama University more IB friendly, the AC, has set up an IB student support system with IB student advisors, to help IB students adjust to academic and campus life and meet IB student needs. In 2016, a survey on IB students was published[7], which looked into the views and perspectives of IB students studying at Okayama University. The feedback obtained from the students, helped student advisors to understand IB student perceptions, their hurdles and their expectations. The present survey including AAs, is part of an ongoing effort by Okayama University AC, towards improving the overall university system and efficiently cater to the needs of all IB students.

METHOD OF SURVEY

Members of the Okayama University AC, actively involved in IB admissions and IB student support, constructed a questionnaire for faculty AAs where IB students are presently enrolled. Each of the 10 questions in the questionnaire, was intended to give AAs an opportunity to share their views experiences with IB students studying at their respective departments, for a period of at least one year from the time of enrollment. The contents of the questionnaire covered the following areas;

a) Expectations of IB students before enrollment
b) Changes in expectations over time
c) Impressive aspects of IB students
d) Disappointments
e) Impressions of non-IB students toward IB students
f) IB student performance
g) Familiarity of other faculty members with the IB education system
h) Need for departmental briefing on IB education and IB students prior to enrollment

i) Need for assistance from AC IB student Advisors regarding IB students
j) Suggestions to improve IB admissions and help IB students adapt smoothly to academic and campus life

Following approval from all members at the AC, the questionnaire was used in the survey. It was also decided to keep the names and affiliations of AAs, anonymous. After receiving permission from each AA, a total of 11 AAs, who had at least 1 year experience with IB students, were interviewed over a period of 3 months, extending from October 2016 to January 2017. Each interview was conducted by 2 AC members at the respective offices of the AAs, and lasted 30 minutes to 1 hour. All AAs consented to this survey and willingly answered every question in the questionnaire. No voice recordings were made.

RESULTS OF SURVEY

Expectations of IB students prior to enrollment

More than 50% of AAs had high expectations of IB students and hoped IB students, based on their educational background, would be positive, interactive and open minded. More than 25% of AAs had little or no knowledge about the IB education system as a whole, except that it was globally recognized. A little less than 20% of AAs, were concerned about the big difference between the Japanese High School Education (JHE) and the IBDP educational approach. Some expressed confusion regarding accepting IBDP students without any entrance exams, while others wondered whether a high IBDP score correlated with better academic performance.

Changes in expectations overtime

Following admission, more than 35% of AAs were impressed with IB students, since they were all fluent in English, independent minded and outgoing. AAs believed, these special qualities would enable IB students to create a positive impact on Japanese Higher Education. IB students interviewed in the previous study had mentioned a discrepancy in curriculum adjustments for fall enrollments, which had initially caused confusion and took time to adjust. In reference to this, initially, almost 35% AAs expressed concern over whether IB students enrolled in fall, would be able to cover the gap in the curriculum and graduate in 4 years. However, over time, they found IB students to work hard in order to overcome this initial adjustment phase. Less than 30 % AAs also noted that, following enrollment and consequent interactions with IB students, they were able to comprehend the immense gap between the Japanese higher education and IB education.

Impressive aspects of IB students

All AAs agreed that, IB students were fluent in English, cheerful, friendly, with good communication and presentation skills, worked independently or in groups, had strong opinions, and were very global minded. Some AAs also added that their IB student's academic performance was excellent and among the top ranking students in the class.

Disappointments

Rather than disappointments, more than two thirds of AAs expressed concern over the difference in the education style between the IB and Japanese Higher Education, which led to initial adjustment difficulties, such as difficulty in understanding lectures, writing reports, understanding technical terms in Japanese, and concentrating in big classrooms with many students. Some IB students were also confused when choosing subjects, as their future career goals were unclear, which initially led to low academic performance. However, they worked hard and showed improvement over time. The remaining one third of AAs, found little or no

differences among IB students and Japanese high school students, particularly IB students coming from Japanese IB schools or those who had attended Japanese cram schools or had prepared for the Japanese National University Entrance exam. Finally, most AAs agreed that these were preliminary impressions and, it was still too early to make general predictions about IB students, considering the fewer number of IB students in each department.

Impressions of non-IB students toward IB students

Feedback from other Japanese high school students or through personal observations, two thirds of AAs stated that, IB students adjusted well with other students due to their friendly, outgoing nature. Being part of various club activities, IB students developed a mutual bond with other students, where IB students helped other students with their English and, other students helped IB students with their Japanese. Some AAs also added that, IB students were kind and generous towards other students and took leadership roles during group work or presentations. In addition, senior IB students also helped new IB students adjust to university life. One third of AAs noted that, almost all Japanese high school students considered IB students as any other classmate and were not much aware about their IB educational background. Overall, there were no big adjustment difficulties between IB students and Japanese high school students.

IB student performance

Almost 50% of AAs were satisfied with the academic performances of IB students, and some were even highly satisfied. A little over 25% AAs hoped that, IB students would work harder to overcome difficulties in writing reports and understanding long lectures in Japanese. Most AA felt, it took IB students usually 6 months to 1 year in average, to completely adjust to the new Japanese academic environment. However AAs were optimistic about IB students, since those few IB students who initially faced some academic hurdles, worked very hard to overcome the situation, and improved their academic performance. Regarding difficulties with Japanese technical terms in Chinese characters (Kanji), AAs felt over time, IB students would pick up the pace and that this aspect was not so alarming. However, one important aspect of the IBDP curriculum that AAs brought into focus was, the depth of the curriculum covered in the 6 subject groups. Some AA felt, IB students who took subjects in higher level (HL), that is, 240 hours of study time, had similar subject knowledge as Japanese high school students, but IB students who took the same subject in standard level (SL), that is, 150 hours study time, sometimes lacked in-depth knowledge about that particular subject. Nevertheless, all AAs felt, if IB students worked hard on any subject, they could master it like any other student, since prior in-depth knowledge in any subject, was not a pre-requisite.

Familiarity of other faculty members with the IB education system

More than 70 % of AAs mentioned that, besides faculty members actively involved in IB admissions, others had little or no knowledge about the IB education system or IB student backgrounds. While most faculty members were eager to admit IB students, as they believed IB students would be an asset to Japanese society from a global point of view, few faculty members were unsure whether IB students, with average or low DP scores, could actually contribute to the ongoing internationalization of Japanese Higher Education.

Need for departmental short briefing prior to enrollment

One third of AAs, who had some experience with IB students, felt they did not require initial briefing on IB students and IB education, as they were already quite familiar with the IB education system. However, two thirds of AAs, expressed a strong desire to hold short briefing sessions for new faculty members, who had little or no exposure to IB education.

Need for assistance from AC members regarding IB students

Similarly, AAs advisors who were eager about IB student enrollment but were new to the IB education system, wanted to learn more about the IB and IB students and hoped that, intermittent briefing sessions from AC members, would provide helpful information about IB students and assist them in creating a more IB friendly academic environment. Experienced AAs felt the student support system provided by the AC was very helpful, as IB students shared a more casual and friendly teacher-student relationship with AC IB advisors. They added, that this effort by the AC, would prove very helpful in the long run, as the number of IB students at Okayama University continues to increase, and further cooperation between AAs and AC advisors would become essential.

Suggestions for AC members regarding IB admissions

The following suggestions were made by AAs for IB students, interested in studying at Okayama University. Besides students enrolling in the English based program, other IB students need to become a little familiar with the Japanese high school education system, including Kanji for technical terms. As advice for AC members, they were asked to provide continuous support to IB students, and hold short briefing sessions for faculty members interested in enrolling IB students. Finally, in order to make Okayama University more IB friendly, AAs felt it is important for both students and teachers, to change their mindset and look beyond traditional ways of Japanese higher education, in addition to becoming more familiar with global standards of education.

DISCUSSION

Internationalization of higher education in any country requires changes and adjustments in existing educational policies to meet trending global standards, from both academic and socio-economic perspectives [9]. Since the 1980s, the Japanese government has been making efforts to internationalize the higher education sector by expanding their own system, by increasing the number of foreign students in Japanese Universities and more recently, by increasing foreign faculty to transform home-grown students[10-13].

The IB education system although internationally accredited, is relatively unknown to most Japanese people, including educators. Even until recent years, knowledge about the IB was limited to parents of children attending international schools. It was only until 1979, that MEXT officially recognized the IB diploma as an equivalent to Japanese high school graduation [3-4].

Nevertheless, questions still remain as to how the IB can make a difference in Japanese Higher Education. Since the IB emphasizes inquiry-based learning and critical thinking skills, perhaps it can help the expansion of Japanese education beyond knowledge acquisition and exam-centered admission policies. At the base of IB education lies the core concept of “not just knowing what we know — but how we know it”.

Five years ago, when Okayama University decided to accept IBDP students, only faculty members involved in IB admissions had knowledge about the IB education system. For other teachers and students, IB was almost an unknown entity. Therefore, when the first IB students enrolled at Okayama University, it was a challenge for both the IB students and the AAs. While, IB students felt it was a great opportunity to study at a national university, without having to take the national university entrance exam, AAs were eager to accept IB students coming from a globally recognized educational background, in hope that they would

further internationalize the existing educational environment[14]. Following admission, both AAs and IB students had varied experiences. Although the overall IB student impressions remained positive, AAs realized that, all IB students were not alike and in some cases, IB students were somewhat different from other Japanese high school students.

Although it was mandatory for all IB students to take the subject Japanese language A, equivalent to native Japanese in the Diploma program, in order to be eligible for admission into the various faculties of Okayama University (excluding the English based course), some IB students still faced difficulties while writing reports and understanding technical terms in Japanese. For some AAs, this was unexpected, as most AAs believed that the language proficiency of IB students who took Japanese Language A, were no different from other Japanese high school students. The importance of knowing Japanese in Japanese Higher Education, lies in the fact that most undergraduate subjects are taught in Japanese. Therefore, a certain level of Japanese proficiency is expected of all students entering the undergraduate program, irrespective of student background or faculty.

Another aspect new to most IB students in the undergraduate program, was the ability to memorize versus the ability to discuss. At IB schools, students attend small classes where every student actively participates in discussions. However, at Japanese universities, due to the greater number of students, most lessons in general education, are lecture oriented and there is little room for discussion. In addition, Japanese high school students are accustomed to the traditional learning system of knowledge acquisition, without much discussion. Therefore, they are familiar with lecture oriented lessons compared to IB students.

In spite of the inevitable, initial adjustment phase, most AAs felt, IB students worked hard and were able to overcome such preliminary hurdles within a few months and, AAs who hosted more than one IB student, used their experience to guide new IB students in their initial adjustment phase. However few AAs also felt that, since IB students were entering the Japanese higher education system, they should try to make effort to fit in, like any other Japanese high school students.

To adapt to any new academic environment, requires effort from all persons involved, including students, teachers and concerned authority.

Students on their part need the capability to familiarize themselves with completely new and challenging environments, which fortunately, IB students are well trained to do. Perhaps for IB students, a deeper understanding of the Japanese culture with regard to senior-junior student relationships, or the habit of using formal Japanese in specific situations, etc. could be helpful. Possibly, that is why IB students from IB schools in Japan, seem to adjust faster to university life. In addition, if AAs can accept the fact that, IB students are different from other Japanese high school students, in terms of thinking and absorbing knowledge, perhaps they can understand IB students more easily and, provide better guidance and encouragement. In an ever evolving world, every student needs to be encouraged to be themselves and overcome stereotypes.

CONCLUSION

Although IBDP students at Okayama University are enrolled without having to take the standard written examination or any other individual entrance examinations, their eagerness to learn, is no less than Japanese high school students, who take the general university

entrance exam. Therefore, support from AAs in the early stages of orientation, is essential for IB students to adjust to the new way of learning and new educational approach. At Okayama University, AAs are making every effort to understand and educate themselves about the IB education system and IB students. Some faculties are even holding meetings to discuss alternative ways to educate IB students. As a pioneer of IB student admissions in Japan, collaborative efforts by IB student advisors and AAs at Okayama University, are fully underway to create a more IB friendly University and increase the number of IBDP students.

ACKNOWLEDGEMENT

The authors would like to convey their sincere gratitude to all the Academic Advisors who kindly agreed to take the survey and provide helpful and valuable information about IB students in their respective departments.

REFERENCES

1. International Baccalaureate Organization: http://www.ibo.org/about-the-ib/
2. Conley et al. (2014) International Baccalaureate Diploma Program: Examining College Readiness. *The Education Policy Improvement Center.* http://www.ibo.org/contentassets/d74675437b4f4ab38312702599a432f1/ib_diploma_programme_examining_college_rediness_2014_0715_000.pdf
3. Japan International Baccalaureate: http://www.ibo.org/about-the-ib/the-ib-by-country/j/japan/
4. Iwasaki, K. (2013) Will the International Baccalaureate Take Off in Japan? Nippon.com. http://www.nippon.com/en/currents/d00096/
5. *Japan Society for the Promotion of science* https://www.jps.go.jp/english/e-tgu/selection.html
6. Ueda et al. (2015) Okayama University International Baccalaureate entrance examination design- Present and Future (In Japanese). Daigaku Nyushi Kenkyu Journal. Vol.26, 147-154.
7. Mahmood et al (2016) The International Baccalaureate Diploma Student Perspective on Student Life at Okayama University. International Journal of Multidisciplinary Academic Research .Vol. 4, No.3.
8. Yonezawa, A. (2009) The Internationalization of Japanese Higher Education: Policy Debates and Realities. Nagoya Higher Education Research. No. 9.
9. Schriewer J. (2003) Globalization in Education: process and discourse. Policy Futures in Education, Volume 1, Number 2.
10. Huang, F. (2007). Internationalization of higher education in the developing and emerging countries: A focus on transnational higher education in Asia. Journal of Studies in International Education. 11, 421-432.
11. Huang, F. (2006). Internationalization of university curricula in Japan: Major policies and practice since the 1980s. Journal of Studies in International Education. 10, 102-118.
12. Burgess, C., Gibson, I., Klaphake, J., Selzer, M. (2010). The 'Global 30' Project and Japanese higher education reform: an example of a 'closing in' or an 'opening up'? Globalisation, Societies, and Education. Volume 8, Issue 4.
13. Agawa, N. (2011). The internationalization of Japan's higher education: Challenges and evolution. Repères Campus France. 10.
14. Ninomiya, A., Knight, J., & Watanabe, A. (2009). The past, present, and future of internationalization in Japan. Journal of Studies in International Education. 13(2), 117-124.

IB friendly Japanese University Survey

Background: The number of IB students applying to Japanese Universities is increasing. Okayama University has been a pioneer in not only IB admissions but also through IB student support and creating IB awareness through research and faculty education. In order to create a more IB friendly University, Okayama University has published research on IB student voices and IB student Academic advisors regarding student life and adjustments following admission. This is the last step in this mission to hear the voices of IB college counselors regarding their opinions about the present situation of IB admissions at Japanese National Universities and suggestions for creating a more IB friendly University based on IB student needs.

Method: Twenty college counselors from International Schools and First Article schools in Japan, were asked to fill out a survey anonymously, with regard to the following questions. a) What are your expectations from Japanese National Universities? b) What are some disappointing aspects of Admission policies at Japanese Universities? c) What are your suggestions for improving the existing Admission policies? d) What are the reasons behind IB students choosing Foreign Universities over Japanese Universities? e) What are reasons behind IB students choosing Private Universities over National Universities in Japan?

Results of Survey: Lack of understanding of the IB education system leading to unrealistic expectations of IB students was a major concern. Next, unfamiliarity with overseas admission policies causing concerns over age, language requirements, IB credit transfers and subsequent recognition of the IB Diploma were also reasons why IB students opted for foreign universities over national universities. Finally, Japanese Private Universities which have offers similar to overseas Universities are given priority, irrespective of the high costs involved.

Conclusion: This survey helped to get a clear conception of the demands of IB student Admissions and also the extent to which Japanese National Universities can meet their needs to become IB friendly.

Survey Q & A (1-3)

Expectations from Japanese National Universities	Okayama University	
No Center test or additional tests for IB students	☑	
Recognize the IB Diploma	☑	
Reconnize the IB Certificate	☑	(Discovery Program only)
All faculties accepting IB	☑	
Reasonable IB score requirements	☑	(Except Medical school)
Reasonable subject requirements by faculties	☑	
IB student support system	☑	
University has a good understanding of IB	☑	
Clear and concise guidelines	☑	
Transparency regarding Admission Policies	☑	
Conditional offers based on predicted scores	☑	
Campus Safety	☑	
Transfer of IB credits	×	
Availability of dorms for all IB students	×	
One stop IB application system like UCAS in UK	×	
Understanding "critical thinking" & "discusison"	※	
Proper assessment of IB scores and CAS	※	

Dissapointing Japanese University Admission Policies	Okayama University
Too High total Diploma score as high as 42 required	☑
Insufficient or no understanding of IB	☑
Lack of understanding about the IB DP scoring system	☑
Some Universities divide students based on passports	☑
Unrealisitic expectations from IB students	☑
Unclear language requirements	☑
Many Japanese Universities require Maths in HL only	☑
Too complicated admisison policies	☑
Application timing inconvenient for IB students	☑
Medical schools demand too high DP scores	×
Age requirement at Admisison 18 (some IB students are younger)	×
Non-flexibility of conditional offers	×
Unfamiliar with overseas admisison policies	×

Suggestions for improving exsiting Admission Policies		
Clearer admission guidelines	☑	
Specify which subjects are required in HL or SL	☑	
Train Faculty about IB Admissions	☑	
IB students applying with generalized IB score such as 24 should be asked to give a presentation	☑	(Dept. of Educaiton and the Medical school require interviews)
Allow transfer of credits from IB	×	
Incentives for IB students with high IBDP scores of 40 or above	×	
Fix IBDP score ranges for each faculty like	×	
Establish one stop application system for all IB students	×	
Differentiate between Dual Language IB and full English IB	※	

	Foreign Universities	Japanese National Universities
Language Barrier	Can study in English	Must know native level Japanese to study at most faculties
Family Influence	If one or both parents are foreign nationals, they tend to choose universities in the UK, USA, Canada	Children of mixed race and foreigners do not prefer NU *language barrier; cultural differences; lack of undertanding of mixed race students; religious backgrounds; sexual orientation
Job opportunities abroad	Better chance of working abroad	Difficult to work overseas after graduating from a Japanese University
Tuition Fee Waivers/ AttractuveScholarships	Available for students with high academic performance	Difficult
University Reputation	Worldwide	Experience is mostly valuable in Japan
Diversity of student body	In all Foreign Universities	Depends on the location of the University
IB-like education	Similar if not same	Completely different education system
Starting dates of Academic year	Compatible with the IB	Incovenient; students must wait from 4-10 months
Overall costs	Very expensive	Reasonable tuition fees and living expenditure
Licensed jobs in Japan	Not possible	Parents and students who wish to live and work in Japan choose JNU
Overall Safety	Not so secure; depends on the location	Very safe; specially parents of female students prefer JNU
Flexibilty of Academic Choices	Many courses to choose from	Limited
Vast research opportunites	Students interested in a Research Career find more research opportunites	Limited research opprtunties based on the University
IB friendly	Very IB friendly	Most JNU do not have enough knowledge about the IB

	Japanese Private Universities	Japanese National Universities
Academic Competency	Easier	Tougher
Academic Programs in English	Vast choice	Limited Choice
Entrance exam	No entance exam or easier exams	Difficult to pass National Center Test conducted in Japanese
Alumni Network	Very active	Not so active
Globalized Admission Policies	Similar to foreign University admission policies	Not yet
Campus Environment	Many foreign students and students of different educaitonal backgrounds	Limited number of foreign students
Size of Inernaitonal Programs	Extensive	Limited
Fluent/Native English speaking faculty	Many	Limited
Overall cost	Pretty expensive	Very reasonable
Job opportunties	Possible to get job offers abroad	In Japanese companies and Japanese multinaitonal companies with branches overseas

6 Month follow-up survey of Freshman IB students After Admission

Background: As part of the IB student support system at Okayama University, IB students are interviewed 1 month post admission and followed up with another interview at 6 months. The purpose of this interview is to hear IB student voices, find out about their campus and student life and help them adjust further based on their individual needs.

Methods: Seven freshman IB students were given a questionnaire and asked to fill it out anonymously in order to express their opinions freely, at 6 months post admission. The follow-up questionnaire consisted of 10 questions with regard to their student life at Okayama University.

Results: All 7 students willingly participated in the survey. Almost two thirds of students said they were satisfied with their academic and campus life. The remaining one third mentioned difficulties in understanding lecture oriented lessons with many students, including the difference in educational approaches compared to the IB. No student faced any difficulty regarding understanding lectures in or writing reports in Japanese. Most IB students said they had difficulty adjusting to club activities, as they felt club activities were more about human relationships than sports. However, more than half felt it was important to be a part of a club to make new friends and adjust to University life. Finally, some IB students felt University lessons should be more student oriented and the teacher should try to communicate more with each student. IB students hoped that teachers would give them more opportunities to participate in class activities and make greater effort to be more student friendly. Besides textbooks, handouts and worksheets prepared by the teacher would also be appreciated.

Conclusion: IB students felt good to be able to express their opinions freely and were happy that the University was trying to listen to their voices. This survey is a step forward in getting to know about IB student needs and trying wherever possible to provide assistance.

２０１７年４月入学ＩＢ生７人の半年後のフォローアップ調査

１．あなたはアカデミックライフやキャンパスライフに満足していますか？
満足しています：４人
満足していない：２人
どちらとも言えない：１人

２．あなたはグローバル人材育成特別コースに入りましたか？
入りました：５人
入りませんでした：２人

３．日本語で大学の講義はよく理解できますか？
理解できます：６人
先生によります：１人（言葉の問題ではなく内容が分からない）

４．日本語でレポートを書くことは難しいですか？
難しくない：７人

５．部活はしていますか？
はい：２人（楽しいです）
はい：２人　（しかしストレスの原因になっています）
やめました：２人（先輩後輩の関係は難しすぎます）
最初から入っていない：１人

６．学内の他のＩＢ生と触れ合うことはありますか？
あります：７人

７．大学内で英語で話す機会ありますか？だれと？どこで？
あります：７人（英語の授業で；外国人先生と；G コースで；L-cafe で；カフェテリアで；EPOK の学生と等）

８．現在、好きな科目は何ですか？
ありません：２人
あります：５人（美術工芸；音楽；教育；心理学；地元学；コミュニティビジネス；
異文化関係；コミュニケーション；日本国憲法；生物）

９．難しい科目はなんですか？
ありません：　１人
まだ分からない：　２人
あります：（ＩＲＣ；法律；数学；生物）

１０．大学の先生からどんな学生支援を求めていますか？
特にありません：２人
あります：５人
どんな教科書を読めばいいか；授業中ワークシートがあれば良い；答えのヒントがほしい；
授業中学生にも話すチャンスをあたえてほしい；学生と話す時間を作ってほしい；
学生ともっとフランクに話してほしい；
先生に質問したら“中学校と高校で習っているでしょう”と言う発言はつらいからやめてほしい；
先生の講義のハンドアウトがほしい

高等学校での生物の授業における指導法と生徒の関与

－国際バカロレア・ディプロマ プログラムと日本の高等学校とのアプローチの違い－

背景/ねらい

日本の国立大学に入学する国際バカロレア（IB）修了生が増加している。

岡山大学は、IB 入試について 5 年以上の経験があり、多くの IB の生徒、IB 進路指導教師や保護者から「IB 生を大切にする大学」と考えられている。岡山大学は、入学後に IB の学生が経験する教育上のギャップ（IB での教育と日本の高等学校での教育の違い）を埋めるよう継続的に努めている。

調査方法

岡山大学の IB の学生および IB アカデミックアドバイザーからの、大学で授業を受ける際の困難についてのフィードバックを受けて、研究の方法について計画した。同じ数の IB 教育を行う学校（IBS）と日本の高等学校（JHS）を訪問し、10 年生-12 年生の授業での指導方法と生徒の学習方法を比較した。

この研究の対象とする科目は生物とした。その理由は、主たる研究者が、IB の生物（カテゴリ 1）に関する 3 日間のワークショップに参加したことがあり、IB での生物の指導法について精通しているからである。

2017 年 10 月から 2018 年 1 月にかけて、IB 学生アドバイザーと UAA（University Admission Administrator）が、岡山県の高等学校 5 校（スーパー・グローバル・ハイスクール、スーパー・サイエンス・ハイスクールを含む）と、国内の IB に認定されているインターナショナルスクール 5 校を訪問し、生物の授業を観察した。

観察結果

a) IBS の 1 授業での生徒数は 2 人～16 人であるのに対して、JHS では 37 人～40 人で授業が行われていた。

b) IBS の授業は教室で行われていることもあれば教室以外のこともあった。3 人～4 人の生徒を持つある教師は、白板やスライド、資料を使うことをせず、小道具だけを使って教室外で授業をしていた。生徒はとても興味を持ち、楽しんでいるように見えた。一方、JHS では、すべての授業は教室や実験室で、ホワイトボード、スライド、資料を使って行われていた。

c) IBS のほとんどの授業は議論を中心に行われていた。一方、JHS では、授業のほとんどすべてが講義形式であった。

d)教師により異なっているが、ほとんどの IBS の教師は、授業の初めから生徒に意見を求めていた。一方、JHS では、教師から質問をされた時やワークシートを使った振り返りの時に生徒の方から活動する様子があった。

e) IBS では、生徒は授業全体を通して自由に質問をすることが多かった。一方、JHS では、何か疑問を持っていたかもしれないが、生徒から積極的に質問をすることはな

かった。

f) IBS では、生徒が互いに意見を交わしながら授業が進められていた。一方、JHS では、教師が意見交換をするよう指示した場合に、生徒は特定のトピックについて議論をしていた。

g) IBS では、ほとんどの生徒が、記録を取ったり、答えを捜したりするために自分のパソコンを持っていた。一方、JHS では、すべての生徒は、スライドや教師が準備したワークシートに集中していた。

h) ほとんどの IB の生徒は、授業の前にしっかりと準備をし、調べていた。一方、JHS では、教師が授業の準備を工夫し、生徒が準備や調べることをあまりしなくても授業を受けられるようしていた。

i) IBS では、生徒の人数がより少ないために、一つの授業で発展レベル（HL）と標準レベル（SL）を同時に展開しなければならないことがあった。一方、JHS の授業では、学年ごとに教えられている。

j) IBS では、時間にもよるが、昼休みの前後などで、授業中にも生徒が自由に食べたり飲んだりしている学校があった。一方、JHS では、授業中に飲んだり食べたりする生徒は見られなかった。

結論

まず、IBS と JHS の最大の違いは、授業での生徒数であると言える。生徒が少ない IBS では、JHS より、教師と生徒との間で意見や考えを交換するための機会をより多く提供できることは明らかである。

次に、国際的に認定された IB プログラムの文化と日本の文化の違いがある。IBS では、生徒が自由に意見を表明し、積極的にすべてのクラスの活動に参加することを奨励している。一方、日本文化では、聞くことを大切にしていて、話すことは控えめである。JHS の教師は様々な手法で生徒の積極性を引き出そうとしているが、自分の考えを表現する力をつけようとするならば、時間をかけて練習する必要がある。

最後に、IBS では、生徒は世界中の大学への進学のための準備をしているが、JHS では、生徒は日本国内の大学に進学することを目指しており、教師は大学の行う試験や「センター試験」に向けた指導をしている。試験は、記述する方法が中心であり、生徒は自分の意見を声に出して言うことはない。特に、「センター試験」で高得点を取るためには、科目についての知識の習得に取り組む必要がある。したがって、教師は、センター試験の準備に焦点を当てた授業を行うことになり、発展的な調査などに時間を取ることはない。JHS では、生徒に必要なすべての知識を教えることに教師は責任を負っている。一方、IBS では、学習に対して生徒の方にその主な責任があり、教師は生徒がさらに深く学べるように助言と資料提供をする。

Teaching methods and student engagement in High School Biology lessons: Differences in approach between the International Baccalaureate Diploma Program and Japanese High School System

Background/Aim: The number of IB graduates entering Japanese National Universities is on the rise. Okayama University, which has over 5 years of experience regarding IB Admissions in all faculties and, which is considered an "IB friendly University" by many IB students, IB college counselors and parents, is continuously making efforts to balance the educational gap experienced by IB students following admission.

Survey Method: Following feedback from IB students and IB student Academic Advisors at Okayama University, regarding difficulties when taking classes at University, a research protocol was planned to observe an equal number of lessons subject wise, at both IB schools (IBS) and Japanese High schools (JHS) in grades 10-12, respectively, and compare teaching methods and ways of student learning. The subject of choice for this particular research was Biology, as the principal researcher had attended a 3-day workshop on IB Biology (Category 1) and had studied in detail about teaching Biology in the IB. Between October 2017 and January 2018, an IB student advisor and a University Admission Administrator (UAA) involved in IB Admissions, visited 5 Japanese High Schools in Okayama Prefecture (including Super Global and Super Science High Schools) and 5 IB accredited International Schools around Japan, to observe Biology lessons.

Observation Results: **a)** In IBS, the number of students in 1 lesson ranged from (2-16) students/class, compared to (37-40) students/class in JHS. **b)** In IBS, lessons were not always done in classroom. Some teachers with 3-4 students, had lessons outside the classroom using only props without using white boards, slides or handouts. Students seemed to highly engage in such lessons and have fun. However in JHS, all lessons were conducted inside a classroom using white boards, slides and handouts. **c)** While most lessons in IBS were discussion based, almost all JHS lessons were lecture oriented. **d)** Student engagement in the IBS depended on the teacher. Most IBS teachers involved the students actively right from the beginning of lesson while in JHS, student involvement and student reflection was seen when students were asked a question or given a worksheet to reflect upon the lesson. **e)** In IBS, students often asked questions throughout the whole lesson, while in JHS, students did not ask any questions to the teacher unless they were asked if they had any

questions. **f)** In IBS, student interaction in class was ongoing, while at JHS students interacted in class when the teacher encouraged them to discuss a certain topic among themselves. **g)** In IBS, most students had their own laptops to take notes or search for answers, while in JHS, all students focused on the lesson (using slides) and worksheet prepared by the teacher. **h)** Most IB students were well prepared and did extensive research before the lesson on their own, whereas for JHS students, the teacher put in a lot of effort to prepare a lesson which would not require the students to study beforehand or do extensive research outside, the class in order to understand the lesson. **i)** In IBS most, higher level and standard level lessons are combined, due to the fewer number of students, while at JHS, lessons are not combined and are taught as per the high school grade. **j)** In some IBS classrooms, students are free to eat and drink depending on the time they have between lessons or other lunch time activities, while in JHS, no student was seen eating or drinking during lessons.

Conclusion: Based on the above observations it is clear that, the biggest difference between IBS and JHS, is the class size, which provides more opportunity for interaction between the teacher and students in IBS than JHS. Next, the cultural difference between an internationally accredited program such as the IB, which encourages students to voice their opinions freely and actively engage in all class activities, and the Japanese culture of listening more, expressing less and speaking when spoken to, was very prominent. Although JHS teachers use different techniques to encourage student involvement, JHS students are by nature shy and it will need many hours of practice to voice their opinion. Lastly, while the IB prepares students for admission to Universities worldwide, the JHS education system is targeted at helping students prepare for the present nationwide university entrance exam or "Center Test" to enter Japanese Universities only, which does not require students to express their opinion vocally, and is more academically challenging. Particularly, students have to work very hard to score high grades in the "Center Test". Therefore, it becomes the sole responsibility of the teacher to provide a tailor made lesson for the students, which focuses on preparing them for the Center Test and which does not require them to take out time to research the subject in advance. In JHS, emphasis is placed on the teacher's preparation to provide all the necessary knowledge to the student, whereas in the IB, the responsibility lies mainly on the student's shoulder and the teacher provides the guidance and resources students need to further the research by themselves.

	IB School	Japanese High School
Class size	2 to 16 students	37 to 40 students
Place	Classroom Outisde the classroom	Classroom or Lab
Lesson type	Discussion based	Predominantly lecture based
Student Engagement	Most students are very involved	Answering to questions by the teacher or when asked to discuss with others
Student Reflection	Expressed vocally and freely	Usually expressed through filling out worksheets at the end of the lesson
Student's asking questions	All throughout the lesson	Quesitons are only asked by the teacher
Study Material	Laptops	Textbooks and worksheets prepared by the teacher
Class Prep	Most students researched on the topic beforehand and took active part in discussions	Textbooks only. The teacher prepapred extra handouts for more detailed explanation of the topic
Combined classes	Higher level and standard level students attended the same class	Individual lessons prepared based on the high school year level
Class Environment	Very casual; students eat, drink during lessons	Very academic; no eating and drinking in class
Responsibilty	Mostly taken by students They are very well prepared	Lies solely on the teacher to offer an "easy to understand" lesson. Not much preparation expected of students.

大学教育再生加速プログラム採択事業

「知の理論」をひもとく UNPACKING TOK ワークショップ

概　　要:

このワークショップは、国際バカロレア（IB）教育のコア科目である TOK（Theory of Knowledge）に関するものです。TOK は、私たちが「知っている」と主張することをいったいどのようにして知るのか、という「知識が構築されるプロセス」を深く学ぶことで、探究や考察に必要な能力やスキルを修得し、さらに、知識を概念化して思考する力を養います。このようなプロセスを通して、自分なりのものの見方や主張をより思慮深く、検証的に振り返り、他人との違いを自覚できるよう促していきます。また、さまざまな科目学習において実践することで、自律的で探究的な学習を実現していきます。

TOK は IB 独自の科目であり、IB 教育を受けたことのないものにはなじみのないものです。このため、IB 教育に力をいれている岡山大学と筑波大学の研究者、IB の日本語 A の試験官で高校の国語教諭、IB ディプロマ修了生が協働して、IB を体験したことのない学習者にとって、TOK 流の多角的・多面的思考法などのプロセスを理解するためのワークブックを作成しました（『知の理論』をひもとく UNPACKING TOK」）。このワークブックは、大学の教養教育などを念頭に作成しており、岡山大学では、今年度から、この本を活用して教養教育科目（「知の理論」入門）を開講しています。

ワークショップは、この「『知の理論』をひもとく UNPACKING TOK」の第3章「演習のための素材文」について、参加者同士でグループを作り、協働して読み解くかたちで進めました。第4回までは、この本の著者がコーディネーターとなり、第5回は、実際に TOK を教えている教員やこのワークショップで学んだ人たちがコーディネーターとなりました。いずれの回も、定員いっぱいの参加者の方にお集まりいただき、熱心な活動が見られました。

第１回　開催日時：平成２９年５月２７日（土）　14：00～17：30
　　場所：岡山大学津島キャンパス
　　参加者：IB（候補）校、県内高等学校関係者、IB 修了生受入大学等　４６名

第２回　開催日時：平成２９年６月１７日（土）　14：00～18：00
　　場所：千代田女学園
　　参加者：IB（候補）校等、IB 修了生受入大学等　４６名

第３回　開催日時：平成２９年９月１日（金）　13：00～17：00
　　場所：武蔵野大学有明キャンパス
　　参加者：IB（候補）校等、IB 修了生受入大学等　３６名

第４回　開催日時：平成２９年１０月９日（木）　13：00～17：00
　　場所：大阪岡山大学創立五十周年記念館
　　参加者：IB（候補）校等、IB 修了生受入大学等　４１名

第５回　開催日時：平成３０年３月３日（土）　13：00～17：00
　　場所：岡山大学津島キャンパス
　　参加者：IB 校等、県内高等学校関係者、IB 修了生受入大学等　６４名

IB student talk at L-Café

Date: January 25th, 2018
Time: 16:00-18:00
Place: L-Café
No. of Participants: 27 (IB students: 8 ; other students; 10; Faculty & staff: 9)

Purpose/Aim: As part of the AP program to promote and familiarize IB education at Okayama University among students and teachers, the Admissions Center organized a friendly, casual, 2-hour chat session, between IB students and the other participants, over snacks and drinks, at the L-café.
Activity: One month prior to the talk, all 1st. and 2nd. year IB students were informed about the program and participation was kept voluntary.
Students were given the freedom to choose their own topic and their time of participation. All students showed great interest, but due to class timings, everyone could not join in. Finally, 8 IB students (7 first year and 1 second year) volunteered to participate. Most came for the whole 2 hours while few joined before or after their class. Each student was given about 10 minutes talk time followed by a Q & A from the floor. At the end of their talk, every student was asked about their dream. The topics IB students discussed included:

a) IB Education system
b) Hardships of being bilingual
c) The strength of the IB education in helping them to know themselves
d) The positive effect of IA (internal assessment) and writing extensive reports in the IB Diploma course, which helps them with their present studies.
e) Plans to write a book emphasizing on the beneficial aspects of IB education.
f) A book review

ワークショップ

「知の理論」をひもとく
UNPACKING TOK

第３章「演習のための素材文」を
みんなでいっしょに
TOK思考法で分析してみませんか。

5月27日（土）　14：00～17：30
岡山大学　一般教育棟
C棟２階　C21～25教室（下記リンク地図中のE4）
https://www.okayama-u.ac.jp/tp/access/soumu-access_tsushima_e.html

[お申し込み]
5月20日までに下記のサイトで
http://uo8.nu/ZEdl
18:00～懇親会
参加ご希望のかたはお申込みの際に「参加」に○をしてください。
[お問い合せ]
unpackingtok@gmail.com

[講師]
キャロル・犬飼・ディクソン
森岡明美、井上志音、田原誠

主催：岡山大学（大学教育再生加速プログラム採択事業）共催：武蔵野大学

大学でも TOK！　大学こそ TOK!

「知の理論」をひもとく
ワークショップ

9月1日（金）　13：00～17：00
武蔵野大学 有明キャンパス（１号館303教室）
アクセス→ https://www.musashino-u.ac.jp/ariake/

[ファシリテーター] キャロル・犬飼ディクソン、森岡明美、田原誠
[アドバイザー] 大迫弘和

TOKは「する」ものです。
第３章「演習のための素材文」を
みんなでいっしょに
TOK思考法で分析してみませんか。

[お申し込み] 7月31日までに下記のサイトで
https://goo.gl/gLuc5i

グループワークの性質上、44名で締め切ります。
どなたでも参加できますが、
希望者が多い場合、
今回は大学関係者のかたを優先します。

[お問い合せ] unpackingtok@gmail.com

大学教育再生加速プログラム採択事業

「知の理論」をひもとく
UNPACKING TOK
ワークショップ（第５回）

探究型学習にも役立つ

TOK思考法での テクスト分析 &
ファシリテーター体験

[オーガナイザー] キャロル・犬飼・ディクソン
森岡明美、井上志音、田原誠

ワークショップ参加者（60名まで）
ファシリテーター（5~11名）
募集中!!!

一番の学びは「教える」ことです。
ファシリテーターに興味のある方は
ご連絡ください↓（謝礼あり）。
unpackingtok@gmail.com

3月3日（土）13：00～17：00
岡山大学 農学部 I号館（↓地図中のW4）
https://www.okayama-u.ac.jp/tp/access/soumu-access_tsushima_all.html

お申し込みは→ https://goo.gl/G6W9XS
18:00～懇親会→ お申込みの際に「参加」に○をしてください。

大学教育再生加速プログラム採択事業

「知の理論」をひもとく
UNPACKING TOK
ワークショップ

6月17日（土）　14：00～18：00
千代田女学園（新館１階 視聴覚教室）
アクセス→ http://www.chiyoda-j.ac.jp/access/

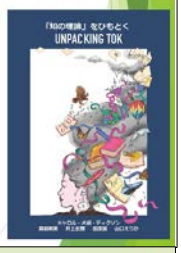
第３章「演習のための素材文」を
みんなでいっしょに
TOK思考法で分析してみませんか。

[ファシリテーター]
キャロル・犬飼・ディクソン
森岡明美、井上志音、田原誠

[お申し込み]
6月14日までに下記のサイトで
goo.gl/jCRIOS

グループワークの性質上
44名で締め切ります。

[お問い合せ]
unpackingtok@gmail.com



大学教育再生加速プログラム採択事業

「知の理論」をひもとく
UNPACKING TOK
ワークショップ（第４回）

10月9日（月・祝日）　13：00～17：00
大阪女学院高等学校（第一会議室）
アクセス→ https://www.osaka-jogakuin.ed.jp/general/about/access.html

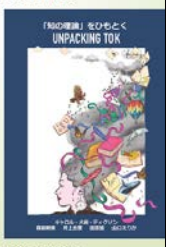
第３章「演習のための素材文」を
みんなでいっしょに
TOK思考法で分析してみませんか。

[ファシリテーター]
井上志音
森岡明美、田原誠

[お申し込み]
9月14日までに
goo.gl/D3yE6aに登録を。

グループワークの性質上
36名で締め切ります。

[お問い合せ]
unpackingtok@gmail.com



IBO主催の公式ワークショップではありません。

Café talk
Eat | Talk | Drink

CONNECT
LEARN
SHARE

Come join us for a journey into the International Baccalaureate (IB) world through our student experiences!

Thursday, January 25th, 4pm-6pm @L-Café

Light Meal: Ethnic snacks

Drinks: Please bring your own

For further information: Tel: 086-251-7284; email: ac@okayama-u.ac.jp

Café talk
Eat | Talk | Drink

CONNECT
LEARN
SHARE

Café talk
Eat | Talk | Drink

大学教育再生加速プログラム（AP）採択事業シンポジウム

～　国際バカロレア修了生の国内大学進学と今後の展望について　～

◆日　　時　　平成２９年9月２１日（木）　１３：００～１７：００

◆場　　所　　岡山大学創立五十周年記念館

プログラム

１２：３０～　　受　　付

１３：００～　　Ⅰ 開会の挨拶　　岡山大学理事・副学長（教育担当）　佐野 寛

Ⅱ 講　　演

１３：１０～１３：３０　■国際バカロレアの推進と国内大学における活用について
文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長　原田 大地 氏

１３：３５～１３：５５　■国際基督教大学における国際バカロレア修了生の受け入れについて
国際基督教大学 アドミッションズ･センター長　森島 泰則 氏

１４：００～１４：２０　■横浜市立大学における国際バカロレア修了生の受け入れについて
横浜市立大学 アドミッション課専門職・学務准教授　出光 直樹 氏

１４：２５～１４：４５　■岡山大学医学部医学科における国際バカロレア修了生の受け入れについて
岡山大学医歯薬学総合研究科教授　松川 昭博

１４：５０～１５：１０　■岡山大学における国際バカロレア修了生の受け入れについて
岡山大学アドミッションセンター准教授　MAHMOOD SABINA

１５：１５～１５：３５　■国際バカロレア一条校が国内の大学に望むこと
仙台育英学園高等学校教諭　石田 真理子 氏

１５：３５～　　休　　憩

１６：００～　　Ⅲ パネルディスカッション

モデレーター

岡山大学副学長（入試改革担当）　田原 誠

パネリスト

文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長　原田 大地 氏
国際基督教大学 アドミッションズ･センター長　森島 泰則 氏
横浜市立大学 アドミッション課専門職・学務准教授　出光 直樹 氏
仙台育英学園高等学校 教諭　石田 真理子 氏
岡山大学 医歯薬学総合研究科教授　松川 昭博
岡山大学 アドミッションセンター准教授　MAHMOOD SABINA

１７：００　　閉　　会

大学教育再生加速プログラム採択事業シンポジウム実施報告
「国際バカロレア修了生の国内大学進学と今後の展望について」

開催日時:平成 29 年 9 月 21 日(木) 13:00～17:00
開催場所:岡山大学創立五十周年記念館
主　　催:岡山大学アドミッションセンター
参　　加:国内国際バカロレア校等、県内高等学校、国際バカロレア受入大学等 72 名
概　　要:

我が国では、「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」(平成 25 年 6 月閣議決定)に基づき、国内における国際バカロレア認定校等を 200 校に増加させることを目標としてさまざまな取り組みが実施され、認定校は着実に増加してきています。また、平成 25 年度からは、ディプロマプログラムの科目の一部を日本語でも実施可能とする「日本語 DP 課程」が企画・導入され、この課程の実施校も、今後大幅な増加が見込まれています。このため、国内の大学には、今後、これまで以上に多数の国際バカロレア修了生の進学が見込まれます。また、進学先についても、国内外からの国際バカロレア修了生を受け入れてきた国際関係のコースばかりでなく、日本語を教授言語とするさまざまな学部や分野へも進学が期待されます。

本シンポジウムでは、国内の大学として、国際バカロレア修了生を積極的に受け入れる意義、国際バカロレア教育を生かすための対応、大学の教育改革に与える影響などについて情報の取りまとめと意見交換などを行うため、文部科学省、高等学校(国際バカロレア認定校)、国際バカロレア修了生を受け入れてきている大学から講師をお招きし、それぞれの視点からご講演をいただきました。

講　　演:

国際バカロレアの推進と国内大学における活用について
　文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長　原田 大地 氏
国際基督教大学における国際バカロレア修了生の受け入れについて
　国際基督教大学 アドミッションズ・センター長　森島 泰則 氏
横浜市立大学における国際バカロレア修了生の受け入れについて
　横浜市立大学 アドミッション課専門職・学務准教授　出光 直樹 氏
岡山大学医学部医学科における国際バカロレア修了生の受け入れについて
　岡山大学医歯薬学総合研究科教授　松川 昭博
岡山大学における国際バカロレア修了生の受け入れについて
　岡山大学アドミッションセンター准教授　MAHMOOD SABINA
国際バカロレア一条校が国内の大学に望むこと
　仙台育英学園高等学校教諭　石田 真理子 氏

文部科学省からは、国際バカロレア教育の振興・普及や大学進学の展望や政策展開などについてご講演いただきました。

次に、大学からは、従来から、多数の国際バカロレア修了生を国内外から受け入れてきた、国際基督教大学から、国際バカロレア修了生受け入れの理由やこれまでの状況、今後の受け入れについてのお考えなどをご報告いただきました。

また、平成 26 年度から国内の国際バカロレア修了生も対象とした国際バカロレア入試を実施している横浜市立大学からは、入試の実施と入学生の状況、今後の受け入れ方針などについてご報告いただきました。

さらに、国立大学として最初に国際バカロレア修了生を受け入れる入試を始めた岡山大学からは、医学部医学科における受け入れの考え方と状況を報告するとともに、大学全体の入学生の状況などについて報告しました。

国際バカロレア認定校としては、「日本語 DP 課程」を最初に取り入れ、平成 29 年 3 月に初の卒業生を輩出された仙台育英高校から、国内大学の国際バカロレア修了生の受け入れについてご意見やご提案を報告していただきました。

この後、講演者の方々に、岡山大学アドミッションセンター長の田原誠をモデレーターとして、1)日本語 DP 課程で学ぶ学生が身に付ける英語力、2)国際バカロレア修了生を受け入れる大学入試制度を主な話題として討論を行いました。

討論内容：

［テーマ１］日本語 DP の語学（英語）力について

日本語 DP を実施する国際バカロレア校、仙台育英の石田氏から、英語による指導は２科目だけであるが、校内は、常に英語に触れる環境であることに加えて、英語で課題に取り組み、最終試験に合格するために、学生の英語力はかなり鍛えられていっているとの見解が示されました。また、参加された沖縄尚学校の宮城氏からは、全校で卒業までに英検２級以上取得を目指しており、英語科目についても相当な英語力がないと授業についていけないので、通常の学生より国際バカロレア生の英語の能力はかなり高いとの発言がありました。

大学からは、国際基督教大学の森島氏が、現在の当大学の語学プログラムシステムは日本語 DP 修了生に対応できるものではないが、今後柔軟性を持って対応できるよう取り組むとの方向性を示されました。また、横浜市立大学の出光氏からは、同大学は基本的に日本語で教育を行っているので日本語 DP 修了生の増加は、志願者の増加に繋がると考えている。また、日本語 DP であれ、英語 DP であれ、国際バカロレア教育の質的な部分に期待しているとの考えが述べられました。

文部科学省の原田氏からは次のような見解が示されました。「当省では日本語 DP を推奨しており、現在の２科目以上英語履修も緩和し、無くしていく方向での調整を考えている。日本語 DP と英語 DP では違いは生じると思うが、各大学のアドミッションポリシーに合致する学生を選抜すれば良い。日本語 DP と通常の英語 DP では語学力に違いが出る可能性はあるが、国際バカロレア教育は総合的に質が評価されているので言語の違いは関係ないと思われる。」

［テーマ２］国際バカロレア入試について

仙台育英の石田氏からは、国際バカロレア教育への理解が進み、出願要件が緩和してきているものの、課題論文の要約の提出等、受験生にとって過大な負担を課す入試もあり、大学側には見直してほしいとの意見が出されました。また、沖縄尚学校の宮城氏からは、

国際バカロレア生は通常クラスの学生に比べ相対的に学力は高いが、国際バカロレア生は最終成績のスコアに準じた評価になるため、国際バカロレアコースの中では相対的に低く見られてしまうとの問題が提起されました。両氏から、ディプロマ取得者だけでなく、大学側が必要とする科目について充分な成績を修めた者は出願できるシステムを検討してもらいたいとの要望がありました。

これらの国際バカロレア校からの意見について、出光氏から横浜市立大学の国際バカロレア入試について、出願資格としてディプロマ取得要件はあるが、指定科目の履修要件は設けていないこと、またディプロマ取得見込みで合格した者がディプロマを取得できなかった場合については考慮できる仕組みになっているとの説明がありました。今後国際バカロレアの科目履修者を受け入れるにあたっては、基準の設け方について検討しなければいけないと述べられました。この他、国際バカロレアの最終成績のスコアが低い場合は、国際バカロレア入試を避け、帰国子女入試で受験する国際バカロレア生もいることが報告されました。

森島氏からは、国際基督教大学では最終的な入試の判定は最終成績のスコアの点数だけではなく、経験を考慮するなど総合的な評価を行っているが、国際バカロレアディプロマ取得は条件なので、取得できなかった場合は合格取消となるとの説明がありました。

モデレーターの田原氏は、岡山大学では本年 10 月から受け入れを開始するグローバル・ディスカバリー・プログラムで、ディプロマを取得していない学生も受け入れていると紹介しました。

岡山大学の松川氏から、本学の医学科が課す面接は、学力検査では測れない医者としての適正を見るために実施しており、今後、面接のスコアと将来の学生の姿を比較することを検討しているとの報告がありました。

これについて出光氏から、横浜市立大学の医学科の国際バカロレア入試では、MMI（Multiple mini interview）の導入が検討されており、推薦入試での MMI の実施結果から、MMI の成績とセンター試験の成績には相関関係があると報告されました。

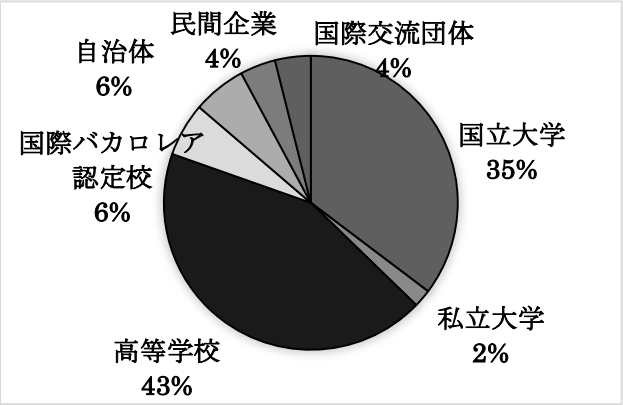
また、出光氏から、国際バカロレア教育の評価を促進するために、国際バカロレア科目の Higher Level については大学で単位認定できるように、文部科学省に制度を整えてほしいとの要望がありました。海外では認められている単位認定が、日本の大学で実施できないのは、特に海外からの国際バカロレア受験生をターゲットにしている大学にとって不利になっているとの意見が出されました。

大学教育再生加速プログラム採択事業シンポジウム
～　国際バカロレア修了生の国内大学進学と今後の展望について　～

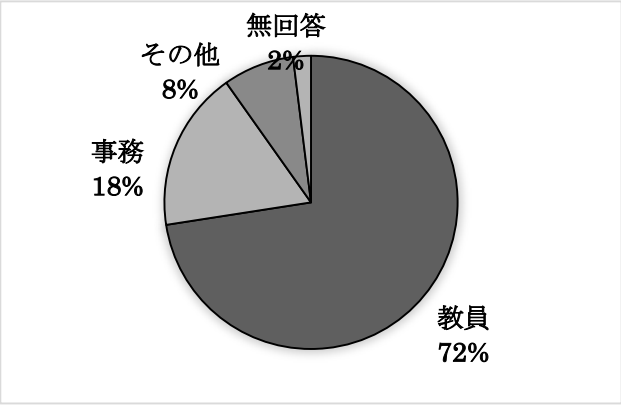
日　　時　　平成２９年９月２１日（木）　１３時００分～１７時００分
場　　所　　岡山大学創立五十周年記念館

参加者数　　７２名（学外６２名　　学内１０名）
アンケート回答者数　５１名

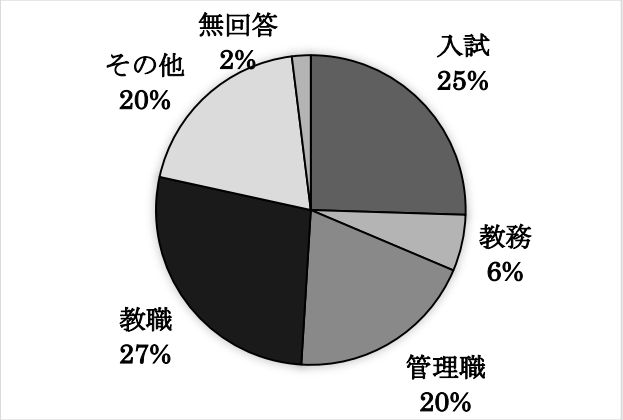
問１　所属を回答ください。



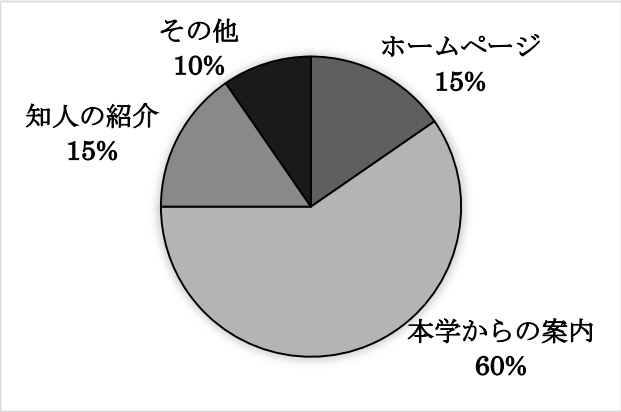
問２　職種をご回答ください。



問３　役職（ご担当のお仕事）を回答ください。



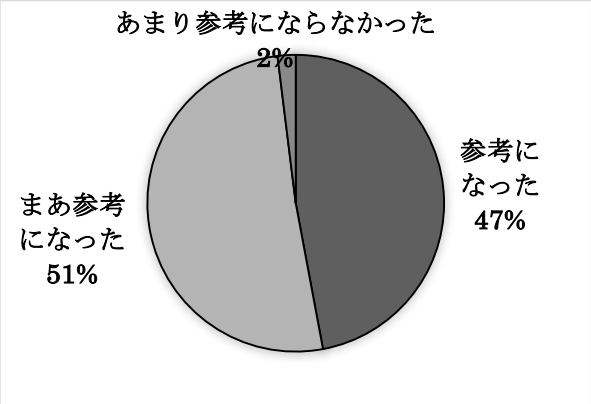
問４　本日のシンポジウムの開催をどちらで知りましたか。



問５　本日のシンポジウムはいかがだったでしょうか。それぞれについて回答ください。

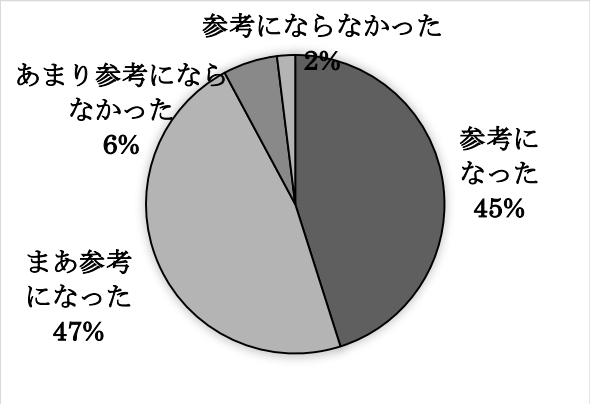
■国際バカロレアの推進と国内大学の活用

文部科学省　　原田　大地



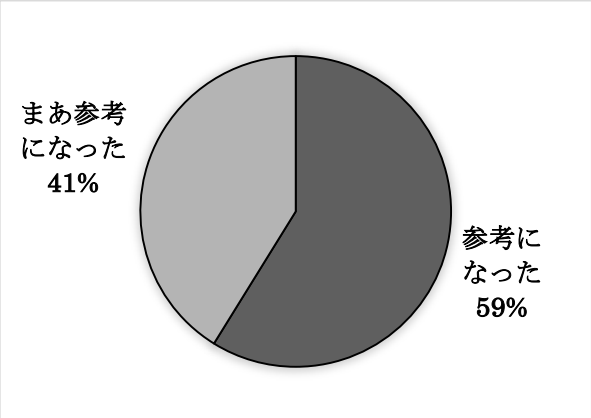
■国際基督教大学における IB 修了生の受け入れ

国際基督教大学　　森島　泰則



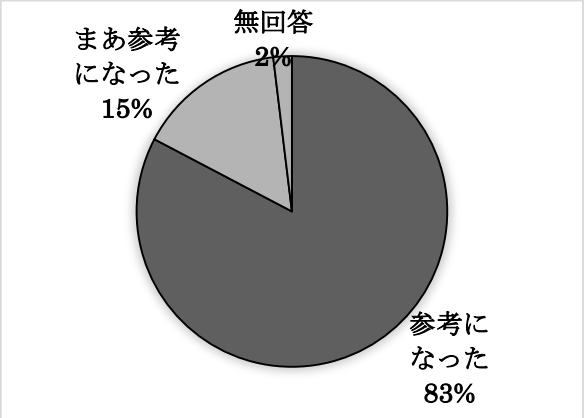
■横浜市立大学における IB 修了生の受け入れ

横浜市立大学　　出光　直樹



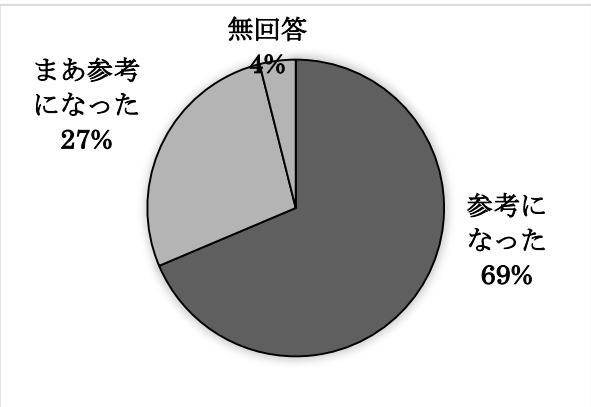
■岡山大学医学部医学科における IB 修了生の受け入れ

岡山大学　　松川　昭博



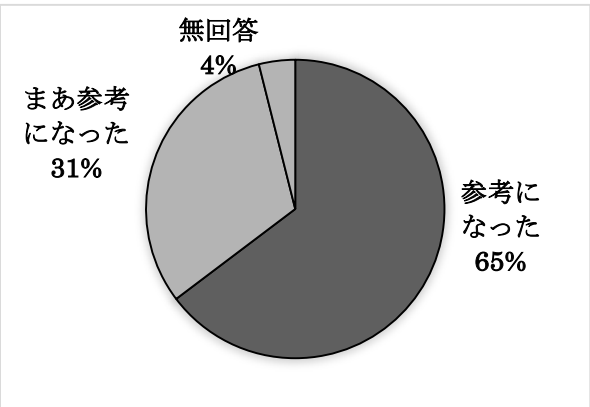
■岡山大学における IB 修了生の受け入れ

岡山大学　　MAHMOOD　SABINA

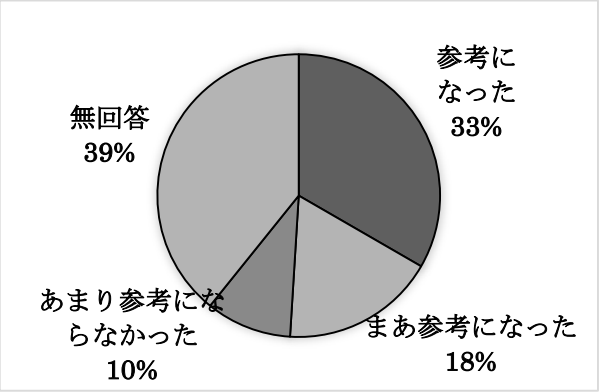


■国際バカロレア一条校が国内の大学に望むこと

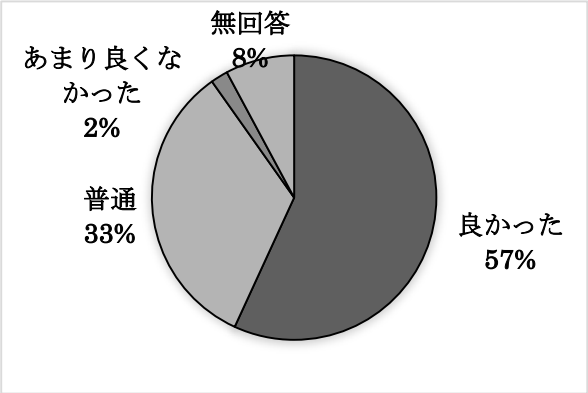
仙台育英学園高等学校　　石田　真理子



■パネルディスカッション



問６．全体の運営はいかがだったでしょうか。



・発表（講演）後に質問時間（5 分以内）を設けてほしかった。質問のみ受付又は質問用紙を事前に配布し、休憩後にその質問に答える方法もあるのではないだろうか（時間の有効活用）

・休憩時間を 1 時間半か遅くとも 2 時間で 1 回入れてほしい。

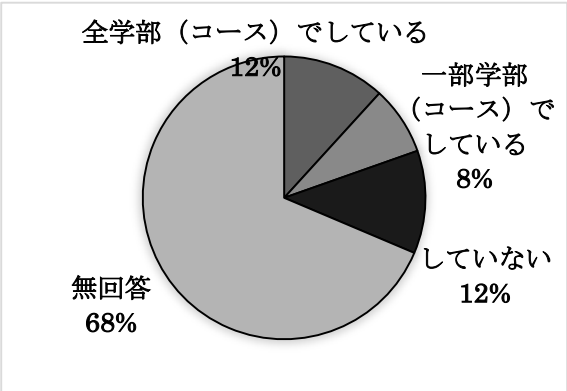
・パネルディスカッションがもう少し長くても良い。

・もう少しパネリストの意見を聞きたかった。

・モデレーターのマイクの音量が小さかった。

問７．大学関係者の方に伺います。

①貴学への IB 入試導入を検討していますか。



②IB 修了生の受け入れについての意見

・選択方法とともにカリキュラムの見直しや FD など、総合的な改革が必要だと感じる。

・先進的で素晴らしい。

・語学力をどのように測るかが課題であると考える。（日本語、英語ともに）

・多くの大学が若干名の募集となっていることからも、対象者が少なく、費用対効果の面で積極的な導入の推進をためらってしまう。対象者が少ないのに新たな入試制度を始めると、入試の複雑化にも繋がってしまう。

・国内と海外の IB 修了生の違いは何だろうか？IB 生（優秀な学生）を紹介していただきましたが、不適応を起こす失敗事例があれば知りたいです。

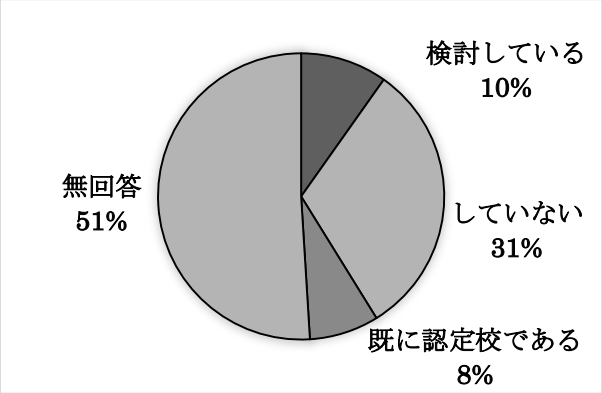
・IB 生を受け入れた後、学生のモチベーションを維持させるためにも大学ができることは何かを模索しています。相談できる場を設けるだけでいいのか、放っておいても学生自ら行動を起こすのか、先行している大学の情報を共有させてもらえるとありがたいです。

・学ぶ場の選択の機会を増やすべきである。IB 教育の素晴らしさはわかるが、IB 修了生に過剰に期待すべきではないだろう。IB 認定校増という方針の中、最も肝心なのは教員養成である。本学も教育学部単科大学として貢献できるような IB 修了生受け入れを推進していきたい。

・今後受け入れるにあたり不安に感じることは受け入れた後のケアについてですが、本日お話を伺い参考になりました。

問 8. 高等学校関係者の方に伺います。

①IB 認定校になることを検討されていますか。



②IB 修了生の大学での受け入れについての意見

・文科省主導で、〇〇年までに受け入れを明確にし、拡大が取り組むことを要請すれば…？新学習指導要領の実施、英語で授業（４技能）、小学校英語導入、大学入試センターの改革に合わせた総合的な動きの中で、工程表をつくり実施していくべきである？

・IB 生の合格基準がかなり高いと思われる大学も日本ではまだまだ多く、海外の大学並みの基準になったら良いと思います。IB 生徒には、岡山大学を勧めようと思っていましたが、今日の入学後のプログラムの話もうかがって、さらに勧めようと思いました。

・公立校では、教員・生徒に IB 修了のためのシステムが組めない。地域の期待は、IB 入試よりも国公立大、私大有名校にある。ただ、IB 修了生の活躍・活動はうらやましい。この様な生徒を育成するためのプログラムは作りたいが、人的補償（人的スキル）がないと無理だろう。

・これだけ IB を重視する方向性であるなら、公立校でもできるよう教員の再教育で資格を取れるように体制を整えるべき。多様性は、需給のアンバランスなど、生徒を迷わせることになる。学習指導要領をすべて IB にするのが良いのでしょうか。

・IB 修了生が大学においても核となる学生となり得ることがわかりました。グローバル社会に向け、大学も多く門戸を広げていくべきだと思います。

・よりシンプルな受け入れをお願いできたらと思います。

・積極的受け入れをお考えなら、もう少し基準を下げていただきたい。

・日本国内の認定校を増やしてもいいが、IB 生が IB 入試だけでなく、他の入試でも大学進学を実現できる環境も整えてほしい。（仙台育英学園、石田先生のお話を聞いて心配になりました。）

・定員が少ないと感じました。

・日本語 DP 生を積極的に受け入れていただきたい。

・実際に IB 生の人数が少ないために大学での IB 入試枠が狭いことは理解できる。しかし今後もそうなのだろうか。導入する大学が増えるのはいいが、各大学での IB 入試枠を広くしないと（IB 入試を重視）、高校（一条校）は、IB 校になる決断ができないと思う。

・IB カリキュラムの内容をご理解いただき、受け入れに際しては、科目試験は課さず、面接や小論、適性などで判断してほしい。

・IB 教育内容、プログラムの実態をもっとお知りいただけると、入試への取り込みが進むのではないかと思います。

・IB 入試において受験生の負担が多大にならない入試を検討いただけましたら幸いです。（発表にもありました EE の要約等）

・大学における DP の単位認定について検討していただきたい。

・IBDP が医学部進学だけに収れんしないかと危惧しています。

問９．国際バカロレア（ディプロマ・プログラム）について何か知りたいことはございますか。

・一条校の IB 導入の見直し。特に公立高校。
・一条校の IB 校のネットワークなどを作れると良いと思います。
・TOK について→教科指導にどう取り入れるか。
・IBDP に必要な教員の育成について。IBDP を導入するための教員課程について。
・読み替え可能科目の整合性。どう考えても（例えば）Biology SL が生物基礎と読み替えられないのでは？
・IB のスコアは公正・フェアであるとして、大学は IB 校独自の特色についてどのように見ているのか（言い換えると、IB 校ならどこでも良いのか）協定や指定校推薦の可能性。
・科目認定による大学進学の話が強調されていましたが、これは、高校サイドの教育体制の自信のなさのように聞こえました。背景には何があるのでしょうか。
・日本語 DP 修了者が国内の大学に進学する背景。
・国内 IB 校同士の競合の問題（特に国公立と私立）

問 10．その他、本日のシンポジウムに関してご意見・ご感想等、自由にご記入ください。

・他大学の IB について知れて良かった。
・国内大学進学についてのシンポジウムだが、高校としては学生の活動（岡大・医学部）の方がより興味深かった。IB 推進のためには、高校へ向けて学生の活動、勉強（資格取得も含めて）をより広報した方が良い。
・実際の生徒さんのデータやインタビューなどが大変参考になりました。
・これから入試制度の導入を検討するにあたり、仙台育英高校のような高校側の生の希望が聞けたことは有意義であった。今後は、国内の認定校だけでなく海外校からも人材獲得するためにどのような入試制度が求められるのかという点についても知っていきたい。
・IB プログラムの現場での実践についてもっと知りたい。どんな授業をしているのか評価はどうなのかなど。
・IB をすることによって生徒たちがどう伸びたのかのデータ追跡、検証の詳しい資料が見てみたい。
・岡山県内の普通科の進学校では、IB プログラムを取り入れるのは難しいのではないか。IB の中の考え方を取り入れるのは多少できると思います。
・本校での IB 認定校実現は厳しいと思いますが、様々な学習活動で IB 的な仕掛けを導入して、生徒のスキルアップを図ることはできそうです。
・本学では、現在 IB 入試の導入に向け検討中であるが、先行大学の実例、受け入れ後の課題等の話、また高校側から大学への要望等も聞くことができ、大変参考になりました。
・狙いがなんなのかよくわかりませんでした。
・IB 導入の難しさを知るとともに、この教育が必要なことも痛感した。IB 取得ができれば良いが、取得そのものを目指すのではなく、そのような教育を実践するという形で、高校での教育を変えていきたいと思う。
・大学入学後も IB 生徒が活躍している事例を伺うことができてよかった。
・バカロレア（IB 取得）についての国内大学での入試等における評価と、国内の高校での導入の動向は、互いに大きく関係していることを再確認しました。県立高校でどこまで導入できるか、課題は多いと思いますが、生活の場が国際的になる今後には不可欠だと思います。
・IB 入試 11 月頃に IB 生徒の能力が活かされる AO 入試や推薦入試が重なるため、IB 生徒の入試幅が狭くなることが懸念される。
・IB の特に HL のスコアを大学にて単位認定していただけるよう、よろしくお願いします。
・とても勉強になりました。参考になりました。ありがとうございました。（４件）
・来年は IB 学会と連日開催にしていただきたいです。

海外及び国内 IB 校への広報実績

➢ IB 生来訪一覧

日付	訪問者	学校名
平成 29 年 4 月 1 日（土）	College Admissions Counselor	サンモール・インターナショナルスクール
4 月 14 日（金）	11 年生，保護者	清泉インターナショナルスクール
5 月 1 日（月）	11 年生，保護者	横浜インターナショナルスクール
6 月 1 日（木）	13 年生，保護者	South Island School, Hong Kong
6 月 22 日（木）	12 年生	サンモール・インターナショナルスクール
7 月 6 日（木）	10 年生，保護者	ISS International School Singapore
7 月 12 日（水）	12 年生，保護者	King George V school
7 月 25 日（火）	10 年生，保護者	International School Manila
8 月 7 日（月）	11 年生，保護者	名古屋インターナショナルスクール
12 月 5 日（火）	教員	名古屋国際中学校・高等学校

➢ IB 校訪問調査実施学校数　３５校　海外１３校、国内２２校

○ 海外 IB 校訪問先一覧

日付	国・都市	学校名
平成 29 年 12 月 4 日（月）	ﾍﾞﾄﾅﾑ　ﾎｰﾁﾐﾝ	Australian International School
12 月 6 日（水）	ﾍﾞﾄﾅﾑ　ﾊﾉｲ	United Nations International School of Hanoi
平成 30 年 2 月 7 日（水）	ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ　ｼﾞｬｶﾙﾀ	British School Jakarta
2 月 8 日（木）	〃	Jakarta Intercultural School
2 月 12 日（月）	ﾌｨﾘﾋﾟﾝ　ﾏﾆﾗ	International School Manila
2 月 19 日（月）	ﾄﾞｲﾂ　ﾃﾞｭｯｾﾙﾄﾞﾙﾌ	International School of Düsseldorf, e.V.
2 月 20 日（火）	ﾄﾞｲﾂ　ﾌﾗﾝｸﾌﾙﾄ	International School Frankfurt Rhein-Main
2 月 22 日（木）	ﾍﾞﾙｷﾞｰ　ﾌﾞﾘｭｯｾﾙ	The International School of Brussels
3 月 14 日（水）	ｵﾗﾝﾀﾞ　ｱﾑｽﾃﾙﾀﾞﾑ	International School of Amsterdam
3 月 15 日（木）	ｽｲｽ　ﾌﾟﾘｰ	College Champittet
3 月 16 日（金）	ｽｲｽ　ｼﾞｭﾈｰｳﾞ	International School of Geneva
		（College Alpin Beau Soleil　教員と面談）
3 月 23 日（金）	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ	Overseas Family School
3 月 24 日（土）	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ	UWC South East Asia

○ 国内 IB 校訪問先一覧

日付	県・市区	学校名
平成 29 年 7 月 15 日（土）	広島県福山市	英数学館高等学校
9 月 15 日（金）	東京都世田谷区	ｾﾝﾄ･ﾒﾘｰｽﾞ･ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ（ｶﾚｯｼﾞﾌｪｱ） 対応校：ｾﾝﾄ･ﾒﾘｰｽﾞ･ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ，加藤学園暁秀高等学校，ぐんま国際ｱｶﾃﾞﾐｰ，K ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ，横浜ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ，立命館宇治高等学校，ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ･ｵﾌﾞ･ｻﾞ･ｾｲｸﾘｯﾄﾞ，ｶﾅﾃﾞｨｱﾝ･ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ，ｶﾅﾃﾞｨｱﾝｱｶﾃﾞﾐｰ，ｸﾘｽﾁｬﾝ･ｱｶﾃﾞﾐｰ，ﾆｭｰｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ･ｵﾌﾞ･ｼﾞｬﾊﾟﾝ，Northfield Mount Hermon, MA, USA
9 月 16 日（土）	京都府宇治市	立命館宇治中学校・高等学校（ｶﾚｯｼﾞﾌｪｱ） 対応校：立命館宇治高等学校，ｶﾅﾃﾞｨｱﾝｱｶﾃﾞﾐｰ，関西学院大阪ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ
10 月 2 日（月）	東京都町田市	玉川学園中・高等部
10 月 19 日（木）	沖縄県那覇市	沖縄尚学高等学校
10 月 27 日（金）	広島県広島市	広島インターナショナルスクール
11 月 8 日（水）	神奈川県横浜市	ｻﾝ･ﾓｰﾙ･ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ（ｶﾚｯｼﾞﾌｪｱ） 対応校：ｻﾝ･ﾓｰﾙ･ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ，加藤学園暁秀高等学校，ﾎﾗｲｿﾞﾝ･ｼﾞｬﾊﾟﾝ･ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ，横浜ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ，清泉ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ，ｾﾝﾄ･ﾒﾘｰｽﾞ･ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ
11 月 9 日（木）	長野県軽井沢市	UWC ISAK Japan
11 月 10 日（金）	東京都目黒区	東京都立国際高等学校
11 月 13 日（月）	兵庫県神戸市	カナディアンアカデミー
11 月 16 日（木）	愛知県名古屋市	名古屋インターナショナルスクール
11 月 17 日（金）	愛知県名古屋市	名古屋国際中学校・高等学校
11 月 30 日（木）	静岡県沼津市	加藤学園暁秀高等学校
12 月 7 日（木）	広島県広島市	AICJ 中学・高等学校
12 月 8 日（金）	神奈川県横浜市	ﾎﾗｲｽﾞﾝ・ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ
1 月 18 日（木）	茨城県つくば市	茗渓学園高等学校
1 月 19 日（金）	茨城県つくば市	つくばインターナショナルスクール
1 月 26 日（金）	福岡県福岡市	福岡インターナショナルスクール
1 月 26 日（金）	福岡県筑紫野市	リンデンホールスクール中高学部
2 月 20 日（火）	宮城県多賀城市	仙台育英学園高等学校
3 月 15 日（木）	群馬県太田市	ぐんま国際アカデミー
3 月 21 日（水・祝）	東京都江東区	K インターナショナルスクール

●２０１７年度国内IB校訪問

2017年度日程			学校名	時間	対象	担当教員	配布物・送付物	内容
7	15	土	英数学館高等学校	12:00-13:00	保護者	上田	大学案内，IB募集要項，岡山大学説明資料，IB入試説明資料、GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット	英数学館高等学校企画の「IB生進路説明会」の中で，中1～高2年生の保護者を対象に岡山大学の概要及び，IB入試ついて説明。
9	15	金	ｾﾝﾄ･ﾒﾘｰｽﾞ･ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ　ｶﾚｯｼﾞﾌｪｱ	13:30-15:30	生徒，高校教諭	マハムド	大学案内，大学概要，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	参加大学数150校。参加高校32校（関東・関西IB校等，海外校）。ブースを訪れた54人の学生及び6人の教員に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
9	16	水	立命館宇治高等学校　ｶﾚｯｼﾞﾌｪｱ	13:00-15:00	生徒，高校教諭，保護者	上田	大学案内，IB募集要項，岡山大学説明資料，IB入試説明資料、GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット	参加大学数40校。参加高校3校（立命館宇治，ｶﾅﾃﾞｨｱﾝｱｶﾃﾞﾐｰ，大阪ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ）。ブースを訪れた学生13名，保護者5名に説明。医学部志願者が多く，その他，教育・工学部に志願者有り。
10	2	月	玉川学園中・高等部	12:45-13:15	Gr9～Gr11生	上田	大学案内，IB募集要項，岡山大学説明資料，IB入試説明資料、GDPパンフ，グローバル人材育成院パンフ，アンケート（生徒・教諭）	生徒36名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
10	19	木	沖縄尚学高等学校	11:30-14:40	1～2年生	飯塚	大学案内，IB募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	生徒25名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
10	27	金	広島インターナショナルスクール	13:00-17:30	Gr10生，保護者	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	IB Biology, SLの授業見学後，生徒3名及び保護者7名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
11	8	水	ｻﾝ･ﾓｰﾙ･ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ　ｶﾚｯｼﾞﾌｪｱ	14:30-17:30	生徒，高校教諭	マハムド	大学案内，大学概要，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	参加大学数20校。参加高校11校（関東IB校等）。ブースを訪れた31人の学生及び6人の教員に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
11	9	木	UWC ISAK Japan	14:00-18:00	留学生	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	ブースを訪れた生徒7名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
11	10	金	東京都立国際高等学校	11:50-13:50	高校教諭	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（教諭）	IBカウンセラーに，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
11	13	月	カナディアンアカデミー	12:00-14:00	Gr10～12生	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	生徒7名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
11	16	木	名古屋インターナショナルスクール	11:30-14:30	Gr11～12生，保護者	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	IB Biologyの授業見学後，生徒5名及び保護者1名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
11	17	金	名古屋国際中学校・高等学校	8:30-11:45	Gr10～11生	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	生徒23名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。説明会の後，IB Biology, HLの授業を見学。
11	30	木	加藤学園暁秀高等学校	15:30-20:00	Gr10～11生	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	10年生の生徒46名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。その後，11年生4名の生徒の相談に応じた。
12	7	木	AICJ中学校・高等学校	16:05-17:00	Gr10～12年生	上田	大学案内，IB･GDP募集要項，岡山大学説明資料，IB入試説明資料、GDPパンフ，グローバル人材育成院パンフ，アンケート（生徒・教諭）	生徒36名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
12	8	金	ﾎﾗｲｽﾞﾝ・ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ	15:00-17:00	Gr10～12年生	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	生徒15名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
1	18	木	茗渓学園高等学校	15:30-17:15	Gr10～12年生，保護者	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	生徒・保護者20名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
1	19	金	つくばインターナショナルスクール	8:00-11:10	Gr10～12年生	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	生徒20名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
1	26	金	福岡インターナショナルスクール	11:30-14:10	Gr10～12年生，保護者	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	IB Biologyの授業見学後，生徒10名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
1	26	金	リンデンホールスクール中高学部	15:00-16:45	Gr10～12年生，保護者	マハムド	大学案内，IB･GDP募集要項，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，アンケート（生徒・教諭）	生徒33名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
2	20	火	仙台育英学園高等学校	11:05-11:55	Gr11生	上田	大学案内，IB･GDP募集要項，岡山大学説明資料，IB入試説明資料、GDPパンフ，グローバル人材育成院パンフ，アンケート（生徒・教諭）	生徒１８名を対象に，岡山大学の概要及び，IB入試・GDPについて説明。アンケート調査の実施。
3	15	木	ぐんま国際アカデミー	未		上田	大学案内，IB･GDP募集要項，岡山大学説明資料，IB入試説明資料、GDPパンフ，グローバル人材育成院パンフ，アンケート（生徒・教諭）	
3	21	水/祝	Kインターナショナルスクール	未		上田	大学案内，IB･GDP募集要項，岡山大学説明資料，IB入試説明資料、GDPパンフ，グローバル人材育成院パンフ，アンケート（生徒）	Spring University Fairに参加

●２０１７年度海外IB校訪問

2017年度日程			学校名	時間	国・都市	担当教員	配布物・送付物	内容
12	4	月	Australian International School	11:30-12:40	ベトナム　ホーチミン	田中	大学案内，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，岡山大学グッズ，IB募集要項，アンケート	生徒12名，保護者6名，教員2名を対象に，岡山大学の概要及び，IB・GDP入試，学生生活について説明。今後日本人生徒の増加が予想される。
12	6	水	United Nations International School of Hanoi	12:30-13:10	ベトナム　ハノイ	田中	大学案内，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，岡山大学グッズ，IB募集要項，アンケート	ブースを訪れた保護者2名，生徒2名に対応。医・工学部を志望。学部の概要，GDP等について説明。
2	7	水	British School Jakarta	11:30-13:15	インドネシア　ジャカルタ	マハムド	大学案内，大学概要，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，岡山大学グッズ，IB･GDP募集要項，アンケート	生徒3名，教員2名を対象に，岡山大学の概要及び，IB・GDP入試，学生生活について説明。
2	9	金	Jakarta Intercultural School	10:30-13:00	インドネシア　ジャカルタ	マハムド	大学案内，大学概要，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，岡山大学グッズ，IB･GDP募集要項，アンケート	生徒10名，教員4名を対象に，岡山大学の概要及び，IB・GDP入試，学生生活について説明。
2	12	月	Inernational School Manila	11:00-13:20	フィリピン　マニラ	田中	大学案内，大学概要，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，岡山大学グッズ，IB･GDP募集要項，アンケート	岡山大学の概要及び，IB・GDP入試，学生生活について説明。この他，Manila Japanese Schoolを訪問。
2	19	月	International School of Dusseldorf, e. V.	13:30-17:30	ドイツ　デュッセルドルフ	飯塚	大学案内，大学概要，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，岡山大学グッズ，IB･GDP募集要項，アンケート	９年生、10年生を対象に統計学の授業を実施した後，生徒8名，保護者4名を対象に，岡山大学の概要及び，IB・GDP入試，学生生活について説明。
2	21	水	International School Frankfurt Rhein-Mein	8:00-13:40	ドイツ　フランクフルト	飯塚	大学案内，大学概要，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，岡山大学グッズ，IB･GDP募集要項，アンケート	学年別に生徒14名を対象に，岡山大学の概要及び，IB・GDP入試，学生生活について説明。その後，保護者の方と個人面談。
2	22	木	The International School of Brussels	16:30-18:00	ベルギー　ブリュッセル	飯塚	大学案内，大学概要，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，岡山大学グッズ，IB･GDP募集要項，アンケート	生徒26名，保護者12名を対象に，岡山大学の概要及び，IB・GDP入試，学生生活について説明。
3	14	水	International School of Amsterdam	未	オランダ　アムステルダム	田中	大学案内，IB･GDP募集要項，岡山大学説明資料，IB入試説明資料、GDPパンフ，グローバル人材育成院パンフ，アンケート	
3	15	木	College Champittet	未	スイス　プリー	田中	大学案内，IB･GDP募集要項，岡山大学説明資料，IB入試説明資料、GDPパンフ，グローバル人材育成院パンフ，アンケート	
3	16	金	International School of Geneve	未	スイス　ジュネーヴ	田中	大学案内，IB･GDP募集要項，岡山大学説明資料，IB入試説明資料、GDPパンフ，グローバル人材育成院パンフ，アンケート	
3	23	金	Overseas Family School	未	シンガポール	マハムド	大学案内，大学概要，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，岡山大学グッズ，IB･GDP募集要項，アンケート	
3	24	土	UWCSEA	未	シンガポール	マハムド	大学案内，大学概要，GDPパンフレット，グローバル人材育成院パンフレット，岡山大学グッズ，IB･GDP募集要項，アンケート	

IB校へのアンケート（日本）

期間: 2017年4月～2018年1月末

学校数 : 17

1. コース別の日本人生徒数を教えてください。

(ここで言う「日本人」とは,「日本語（第一言語)が母語の生徒さん」とお考えください。)

コース	11（10）年生･高1	11（12）年生・高2	最終学年・高3
full diploma	93	253	196
certificate course	2	10	23

2. IB certificateを履修しているのはどのような学生ですか。

回答
語学力/学力が限られている生徒。IBフルディプロマが非常に困難な生徒。
サーティフィケイトコースは選択できません。
該当者なし。
特定分野の学習に集中したい生徒。
我が校にはいません。大学進学のため、DPか日本の教育課程かいずれかに集中する必要があるので、サーティフィケイトは奨励されていません。
フルディプロマが大学受験に必要無い生徒。

3. IB diplomaスコアと学業成績は相関関係がありますか。

回答
はい。
学業成績を高得点を出すことと考えるなら、そうです。創造性、膨大な情報暗記、好奇心はIBではあまり測られ
はい、本校のIBDP生はサーティフィケイトの生徒と比較すると学業成績が良い傾向にある。
はい、MYPでもDPでも学業成績が優秀な生徒は、DPスコアが高いです。
はい。このことはIBOによる近年の研究でも認められていますし、世界中で、大学のリクルート方針に反映されています。DPコースは、日本の教育課程より学業的に要求は高いです。
はい、ただ選択科目及びレベル（SL/HL）選択は得点の伸びに影響を及ぼします。

4. HLとSLで学習される科目間に、学習時間以外の違いがありますか。

回答
科目にもよりますが、例えば、人文科学はHLでは通常課題が増加しますが、他の科目ではHLになると一般的に難易度が上がります。
あります。自然科学と数学については、HLではより深い知識が求められます。歴史のHLでは、より幅広い知識が必要です。HLでは、一般的に科目をより深く幅広い学習が必要とされます。
あります。多くの科目で、SLコースとHLコースで網羅される内容が異なっている。
あります。内容の深さと知識の深さ。
質問の意図がわからないが、シラバスと求められているものは、全教科においてSLとHLでは明らかに異なる。
内容の深さと質。HLクラスでは生徒は特にその教科へ没頭します。
学習時間、評価、宿題の量、期待。
あります。コース内容と同様に試験や評価の数が違います。
HLとSLでは内容も要件も異なっています。HLの学生は、各教科でより多くのトピックをこなし、いろいろな試験を受ることになっています。学内評価の要件は大抵同じですが、その他の評価は異なり、HL生にとってハードルが高いです。
HLは学業的により厳しくなる。
あまりない。

5. 生徒さんが進学する大学・学部を決められるおおよその時期を教えて下さい。

回答
10年生以降から大学選択を考え始め、定期的にキャリアカウンセリングや担任のサポートを受け、学資、科目特定能力（おおよそのDP予測点）、職業的関心、将来進学したい国に基づき、選択範囲を狭めていきます。
8月だが、夏期休暇中は、IBの外部試験やIAの準備で結構忙しくしている。その結果が出たあとに願書の受付が締め切られるよう大学に設定してもらいたい。
10年生のときに、勉強したい国や専攻について考え始めます。ほとんどの学生が、11年生を終わるまでに決定し、志望大学を決め、12年生の始めに、願書を準備し出願します。
9～10年生で始め、12年生の初めに出願する大学を決定する。
10年生で進学・就職相談をはじめる。生徒は普通、12年生の1学期に大学に出願する。
10年生または11年生
10年生の秋
11年生の始め
2月末に11年生全員と最初の懇談をし、その後家族との個別懇談で(まだの生徒には）調査を始めるように指導する。
11年生の終わりから12年生の初めです。
11年生の秋頃から春にかけて。11年生の終わりまでに大体決めておき、12年生の秋に決定する。
12年生春
12年生の年頭だが、IB生には、10年生の5月には決定または検討するように言っている。
高校3年生の始めから。夏頃。

6.生徒さんの大学選択について，どのようなことを指導していますか？

回答
費用、奨学金
卒業後の進路・職業
将来進学したい国、場所
大学のカリキュラム、授業、専攻可能科目、研究領域、教育レベル
海外連携校との交換留学プログラム
出願に必要なDPスコア、出願要件、入試の方法
大学のランク、知名度、評判
学生サポート
授業の言語
キャンパスライフ
IB親和性
規模
生徒の希望
家族の意見
パスポートの問題